

証雅の柳川

麻生路郎 ☆ 主宰

六月號

路郎賞「学生」發表



No. 397

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

昭和十三年六月一日發行
前刊大正十三年・通卷三百九十七号



川柳雑誌社主催

本社六月句会

7月本社句会

兼題
「兼題」
辞書 手真似 見晴し 几帳面

今月の会場はナンバです。
高島屋正面向って右です。
地下鉄・市電・バスの交通に便利なところです。

日時 六月七日(火) 午後六時
場所 未生会館

ナンバ高島屋西横バス停前

浪速区新川二丁目六九一

(電話02二二三番)

兼題 「裸一貫」(三句) 豚生路郎選

※部選の入選発表は七月句会の会場で行います。
〔切符の投句は無効となります。〕(句選の裏へ署名記入)

「口止め」(三句) 中島生々庵選

「湯上り」(三句) 市場没食子選

「女文字」(三句) 丸尾潮花選

席題 三題(当日発表)

戸田古方

句評 呈賞 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・舟遊・潮花・文秋・庸佑・

狂二・与呂志・白水・木堂・月都・薫風子・永断

一三天

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切六月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉06〇八一

若本多志著 麻生路郎序

川柳 親とこころ子心

価 150円 送料24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳の中
から親とこころ子心を選り多量に巨
大に集めた三巻の秀句集である。巨
大の愛が加えられた柳人三巻の秀句
と子心の出来が、実に深いものである。
この愛が加えられた柳人三巻の秀句
と子心の出来が、実に深いものである。

川柳雑誌社
大阪住吉区万代西五丁目廿五番地
電話 住吉06〇八一

ビールは アサヒ ゴールド

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急 運転
座席指定 特急券
お求めは ご乗車の5日前から

近畿日本鉄道

不朽洞句帖

麻生路郎

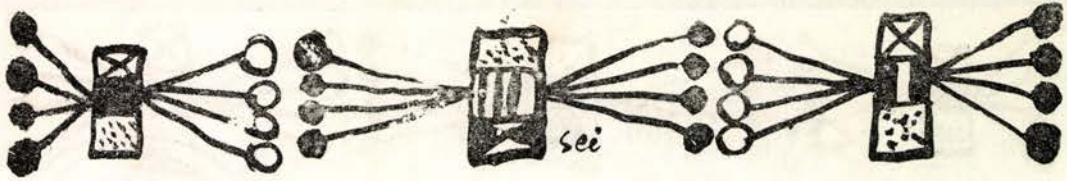


雲の上にいる気が首相耳かまぎす
 人間を忘れ戦術だけに生き
 選挙以外 庶民は化石扱いか
 上京はしても首相の顔も見ず
 八十八もう槍さびも唄わない
 天外の笑いの中に自分を見
 よくきたところを知ってる女将なり
 老い込んだ先輩二級飲むという
 飲むとこでさえもきかない顔になり
 墓に彫る字まで気にして死んでゆく
 どっちみち亡びる国さストで死に
 嫁き遅れ自分で云える年になり

川柳雑誌六月号目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
アール・エッチ・ブライス教授と語る	阿部佐保蘭	(12)
平言俗語の冴え	須崎豆秋	(15)
沈黙の人と散文精神	高鷲亜鈍	(9)
謡曲と川柳	後藤梅志	(14)
選の混迷	直原七面山	(34)
伍健氏の年令について	麻生路郎	(40)
特別課題 「学生」 発表と選評	麻生路郎	(28)
夢かとはかり優勝権獲得	井阪東天紅	(30)
川柳まつり	豆秋・一瓢・牧人 柳宏子・三夫人	(26)
呼び名とよびかけ	松江梅里	(17)
絵と川柳で表現する歴史	戸田古方	(18)
川柳夫婦善哉	(無鬼・富士子) 丸尾潮花	(16)
再び大阪の思い出	酒井ひか平	(20)
★医者と坊主……直原七面山(18)	★雅号由来記……高野むしな	(19)
伊勢・相模・讃岐	富士野鞍馬	(36)
「川柳雑誌」の標語	不二田一三夫	(37)
川柳塔	麻生路郎	(4)
同舟近詠	諸家	(8)
近作柳樽	麻生路郎	(20)
金泥集	北川春葉	(37)
各地柳壇	麻生路郎	(20)
柳界展望	★不朽洞会から	(41)
一路集「告白」	清水白柳	(42)
「浮気」	西いわを	(38)
「農家」	岡田夜潮	(39)
路郎メモ		(46)

題字……麻生路郎・表紙……戸田古方



豊中市 戸田古方

ザマあみろまた飛行機がおちよつた
一字一句たがえず校長さんお読み
一本でやめると顔をみられたり

大阪市 市場没食子

大阪弁で喋ってくれと旅の連れ
春の味それも土筆のしたしもの
出勤の姿働蜂に似て

西宮市 若本多久志

地方ではなどと大阪馬鹿にされ
ああしんど上京中の標準語
薬つかむ思いで強力加美の素

大阪市 正本水客

責任をおうとは嫌な日本語
利用価値があるのか挨拶状がきて
霧のなかからコーラスが生れくる

大阪市 丸尾潮花

濡れて来た傘花びらをたたみ込み

兵庫県 小西無鬼

一枚は彼女にシャッター切らす春

大阪市 西いわを

雰囲気を持たす男と生れて来

岡山市 武部香林

郷

荷造りを解き拾い屋におじぎされ
縮むだけちちんで生きる道とせん

大阪市 北川春巢

借切りバス一升瓶をもうこかし

壁に蔦はわせて文化人が住み

ベレー帽いよいよお人好しになり

ようしゃべると思えば株が上つてた

七転び生命線はまだ信じ

ハワイ 築山快夢起

病室へ逆さ箒も立てられず

日本観光今年も予算だけで過ぎ

社長さん宅では義歯外しとり

大阪市 須崎豆秋

植木鉢一年ぶりに水をやり

夜の蜘蛛死んだまねしたままで死に

怖わいなァと思いがらも判を捺し

ホノルル市 羽佐間柳葉

外国を覗ざる机上の世界観

蒼空の広さへ人のこせこせと

呼出しの電話極秘の声を出し

奈良県 尾崎方正

春や春今日も切花あの娘さげ

士筆見つけてもう春かいな春かいな

堺市 吉田圭井堂

神楽ほど金歯を入れたもく拾い

ヒスるとは気儘と言われ尚ヒスる

役に立つ看護婦奥の匂に入らず

山口県 国弘半休

就職の日の五分刈りを稀に見る

人妻がガチャガチャやつてる赤電話

休業の札がクルクル春の風

防府市 長野井蛙

夢で見たことで女の気をためし

鼻唄は笑いのとまらぬ儲け高

岡山県 直原七面山

北風へ母が恋しい靴磨

相談にあずかる僕も金がなし

鳥取市 河村日満

失敗の話へ拍手鳴りやます

生きのびた笑顔岩湯の中に居る

満開へ下着は冬のまま出掛け

豊中市 足立春雄

フランスの証拠エフエル塔が写つてる

倉敷市 木村千容

悲しみのたねは遺贈の学位証

平和呼ぶ口で争議の闘争の

倉敷市 田垣方大

テレビジョン迎えに出ない妻になり

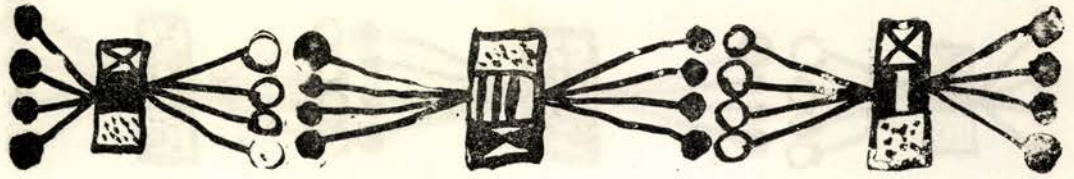
税務署の汚職万才叫びたし

初夏楽しシヨートパンツの娘と歩き

加賀市 野村味平

画才があつてノートを粗末にし

気短かな社長の朝が恐わがられ



他所行きも不断着もないさし向い

大阪市 木村 水堂

家柄がよすぎて恋がはかどらず

酔うても大阪弁はよく値切り

高槻市 福田 丁路

罷り通るチンピラやくざの赤いシャツ

刑務所を出てその道で顔が利き

大阪市 真鍋 一瓢

右翼左翼半端な者がよる所

造船所風景

泊り船の影さえ春の水の色

撓鉄工場

鉄矯める職場は色気抜いた唄

大阪市 後藤 梅志

地獄への道一とすじに急ぎ行く

池田屋のいまはナイフでつけた傷

釣鐘の如く押されるのも楽し

米子市 小西 雄々

模範生家が貧しいから目立ち

特報にされてスターが困る恋

乳を吸う力強さに励まされ

つぼみでも酒さえあれば手を叩き

大阪市 山川 阿茶

紅一点美しすぎて近よれず

男湯へ髪結うてゆくGボーイ

大阪市 金井 文秋

ちよっとした噂実話にもう書かれ

衣食足り三国人と思わせず

三十年ぶりで同窓会

同窓会早速売げたのを数え

話題尽きぬ中に恩師の耳遠し

加賀市 那谷 光郎

出戻ったその鏡台も邪魔にされ

肚立ててしめた障子の尻が開き

尼寺に掃除機電気釜木魚

堀り出したうれしき屑屋よけい飲み

岡山市 浜田 久米雄

初孫のむつきへあれもこれも出し

初孫を産む産院が明う灯き

初孫の目方メートル法で聞き

鳥取市 杉谷 湖山

日本人ばなれしている子に育て

うち貰うてえなと三十遠慮せず

どこ捻ってもエロととんまと殺ばつと

花曇り無沙汰な孫に歩を運び

十二才大人の裏を知りたがり

他所行きの足どり女別にもち

尼崎市 小林 文月

一オクターブ上げてガイドは唱い出し

甥たちの結婚

級友を失望させて彼女嫁き

奈良県 飯降 白香

お百度を踏んだ恋だがいつか覚め

思い出の体臭へ女転転と

呉市 林野 魅光

勝運がなかった事にして戻り

家庭の都合に依り恋もして

岡山県 福島 鉄児

書架だけは立派大衆本並び

うちだけが日の丸出したてれくさき

岡山市 服部 十九平

両親の不和へ子供が早う寝る

啄木のように手を見て貧に座す

尼崎市 長谷川 三司

紹介の名刺ソースの跡がつき

画廊春青児の裸婦の銀の色

よっほどの機嫌祖母が舞うと云う

兵庫県 若林 草右

家庭電化一種買うのも月賦なり

雁首はすげかえられたがまだつまり

岡山県 田村 藤波

就職に女将の力偉大なり

尼寺の椿浮世の色で咲き

先輩の親切カンニングも教え

岡山県 岡田 夜潮

敷いていたらしい座布団進めたり

ゆずられたシートに温う残るもの

京都市 本田 恵二朗

文学の分る課長でホッとす

たかが一日の休暇ゴシップが飛ぶ女事務

岡山市 津田 麦太楼

ひっそりと桜の下でゆでたまご



しつこきは出る振りをしてまだ値切り
嫁き遅れ母はれものに触わるよう

ちよこなんと女房を乗せたスクーター

吹田市 橋本幸男

逢曳のときのベンチへ子と座り

堺市 高崎雄声

かつては部分品として働いたストラップ

黒根県 藤井明朗

花散って恋あっけなく終り

税滞納しても花見の酒に酔い

岡山県 永松東岸

心臓が弱くてボスが死んだとは

整理して夜逃げもせずに坐り替え

高島田スプリースに似た歩み

ボスの居るあたりに新築工事増え

倉敷市 野田素身郎

妻や子の話をされて切り出せず

妻の留守柱の時計まで止まり

出張へもう親の顔忘れとり

肩がこると言い言い孫を手離さず

出棺の家の桜は八分咲き

大阪市 伊達堰子

案じた程チビでもなかった一年生

大阪市 不二田一三夫

ようもまあ我慢しおうて金婚の

妻五十目立ってセンスばやけだし

兵庫県 酒井ひか平

幼稚園娘のような親もあり

労組大会の窓へも花が散って来る

宇部市 津秋六花

博徒にも渡りをつけて立候補と決め

神戸市 丸川初甫

御七夜へ平安朝の弓の音

頭見てくれ散髪屋でおそなった

塩ざけより知らぬ妻なり弁当箱

得意先まで息子の進学喋るとき

岡山県 池田古心

花見とは酒に呑まれた面白さ

黄金の六十年を医者通い

東京都 石居高志

恋をして才女の才を疑われ

三井三池争議

犠牲者もやむなし斗いだ斗いだ

大阪府 早川清生

住込が逃げて真赤なシャツ残る

工場の門へうしろ姿が吸いこまれ

筆太に本名を彫れ俺の墓

岡山市 武部若菜

ドライヤーあなたまかせの眼をつぶり

入学へうちの児だけが返事せず

酒の味芝生が少しあればよし

松嶺に聞き入るは墓と私と

ポンプ小屋しんかんとして花吹雪

堺市 辻圭水

前歴へ日本人の気のちささ

前身を聞くまいなくてはならぬ人
土地の値が天井低うつくらせる

大阪市 児島与呂志

入学へ付いてく妻がそわそわし

飯場もん四五人乗った場所が空き

岡山県 野々口美舟

半分はいねむっている妻の顔

心までとりこにされている家出

西宮市 小浜牧人

団体へ祇園の朝は音もなし

道草の味をぶらんこから覚え

バイヤーを招んで舞妓へ言い含め

豊中市 菱田満秋

豆腐屋をふと呼び止めた春の雪

兵庫県 前川左文字

整形の鼻から愛情失せていき

靴ひもの切れて不吉な日を過し

夢で逢う君じゃ無かった振られよう

大阪市 橘高薫風子

もう俺をのけものにして逢うている

独り身に魚の骨は淋しすぎ

下関市 中村九呂平

順番を待つ間毛糸の手がせわし

尻馬がマスクはずして法螺も交ぜ

これ切りのふとん恩師も丸う寝る

すこしならよからう薬の気で酌がせ

大阪市 西川晃

サービス精神顔だけ笑つとく

夫唱婦随妻の酒量が上つてき

麻菜もう切れてくるのにカモが来ず

釜ヶ崎風景



陰惨な顔で追う身と追われる身

名古屋市 野田 一念

あんなにも脆くも抱かれたのを嘆き

工面した金で白浜勝浦と

相槌を打ったばかりに借りられる

人妻と知らずに瘦せた阿呆らしき

岡山市 林 葵丘

刺激する様に女は告白し

日曜の桜へ交換手だけ残り

神戸市 仲どんたく

母 逝く

母八十時計が止る様に逝き

熱海にて

貫一を蹴とばしそうなハイヒール

平田市 久家代 仕男

緋醉翁君退職

恬淡の君を大地が待って居る

左遷です左遷ですよと飲み歩き

汚職まで吐でやれとは云わなんだ

大阪市 本多 柳志

絶対反対断乎斗争社会党

政治屋の花環清濁立ち並び

出雲市 原 独仙

キスされた位は娘恥とせず

男生徒菓立つ校門振り向かず

大阪市 大谷 月都

対談に出たをさりげなくさりげなく語り

岡山市 江国 幽谷

昔昔の大火もガイドの種になり

防火デー避難することだけ習い

岡山市 光好 陽子

B、Gの食べる話はすぐきまり

テレビばかり見てほころびはほっとかれ

西宮市 河相すゝむ

子を連れて外野にしとく浴衣がけ

お茶漬をわざわざ外で食うメニュー

西宮市 野呂 鶴汀

風体で俺を見下げた話し振り

殺し屋のスタイルが飲むバーの隅

西宮市 樋口 舟遊

からたちの人を疑ぐる耕をたて

内金を納めたようなキッスなり

陽気よし脳病院の手をふやす

新潟県 高野むじな

舌出して居るとは課長さん知らず

恋愛結婚でしたと云うになぜ笑う

高砂市 吉原 紅月

汐干狩大根足をばからず

ふとんける子が夜な夜な倍苦にならず

大阪市 欄 蘭

紙屑の中で花見の酔が覚め

春眠へ遅刻しそうな日が続き

大阪市 石倉 旅風

通行の自由よ生命がけの道
老眼をかけて政治の嘘をよむ
汽車さえもテールライトのピリオッド

大阪市 魚住 満潮

続西成界わい(三句)

入墨が覗いて見合ふいになり

創価学会朝っぱらからねばりに来

寝不足な女の顔も西成区

大阪府 林 昌男

こみ入った話女房を風呂へやり

恋は麻葉か十五貫すり減らし

キスミーの匂いきれいな嘘を言い

愛媛県 村上 旭童

いつの間にためたか酒豪家をたて

指輪もう抜こに抜けない指の節

倉吉市 大前 鳴悦

まだいろは読めぬに流行語は喋り

おばあちゃんですのと如才ない素振り

鳥取市 北村 三歩

委員長電話軽るうにいなせとき

腕章を巻いているので見つめられ

旗見えぬ位置に社長は椅子を変え

神戸市 傍島 静馬

クラス会飲む奴だけの会になり

残りもの勿体なきに豚を飼う

肩書が好きで機嫌がとり易く

われ不孝なりし通りに子も不孝

城下町藩主の遺徳も拝聴し

花まつりを主催して

良い子に負けてはおれず甘茶かけ



岡山市 宗高 矢寸志

子の自慢放任主義をつけ加え

もののわかった親の積りを裏切られ

借りてから気軽に寄れぬ仲になり

電話でみんな用が足りても満たされず

春日永頼張って又子は出かけ

大阪市 河井 庸佑

兵庫県その大きさを意識する

大阪府 谷 沢 好祐

親の血か留守番葡萄酒ソツと飲み

男と男の約束やと児が念を押し

母乳やるのが話題に雲の上

泉大津市 高津 徹也

頼まれて急ごしらえの高砂や

愛媛県 榎 紫光

月給取り羨みサラリーは馬鹿にする

青森市 工藤 甲吉

ベッドぐらしへ新聞が来てくれる

春や春されど税吏がやって来る

女房の箆筒左遷の目にも遭い

西宮市 門 永三舟

日によって失礼しても怒らぬ娘

山に住み登山のよさをまだ知らず

玉野市 伊原 明林

汗の荷を観光バスに追い抜かれ

妻叱るような言葉で交又点

大阪市 藤村 梨花

お人好しらしい動物へも敬語

中立で行くと気の弱さにはふれず

人肌のぬくみにも似て春麗ろ

いくらかになると踏んでのお愛想

相生市 富永 柳洋

本船へ小学校見学

見学の子等へ鞍門チト得意

復船する

機関室にいて見送りへ手も振れず

松江市 小林 孤呂二

赤い爪きわどいとこで盲く逃げ

酔うほどに昔かわらぬ安来節

三等国でもよし桜咲く日本

神戸市 室田 千尋

白きシート母に寝姿言われたり

病める子にシートの白さ痛きまで

豊中市 林 夢虹

財産が出来て疑い深い人

大望は無く夫気軽に釘を打つ

剃り跡の青く女に養なわせ

堺市 吉本 菁風

用心をしすぎて損も徳もせず

金出来て常識的な作を書き

西宮市 山本 一傘

誘惑もされずされてもまた困り

窓の陽にもたれて故郷に話する

指輪ピカピカ五尺そこそこのボス

同舟近詠

大阪市 橋本 緑雨

定年で遊び友達みつからず

意地わるが一人居るのでまともならず

須坂市 高峰 柳児

夜桜へしらで歩けばからまれる

雨の夜も行くところが反抗期

ブームとは遠く余寒が身にこたえ

和歌山市 秋月 宏方

耕耘機牛の味方に生まれて来

司法書士きょうも生きてくための文字

英語ばかり書いた日本製おもちゃ

大洲市 米沢 暁明

答弁は腹が立つ程味気なし

なんぼ出世しても田舎の支店長

東京にいますと親は誇らしげ

極東を子供にきかれても困り

今治市 長野 文庫

年上と知らず奥さんいくつです

近所では評判わるい金を持ち

気まぐれな運悪党に味方する

新居浜市 月原 宵明

春雨だ濡れて行こうよ二次会へ

葉桜のころ予備校へ上京し

花の春安保安保ですんじまい

パチンコへ寄って帰れる時限スト

庶務係花見の下見しに出かけ



橋本緑雨氏

沈黙の人と散文精神

——橋本緑雨氏を語る——

高鷺 亞 鈍

「川柳雑誌」四〇〇号記念を間近かにひ

かえ、創刊当時から路郎師について、現在もなお現役で活躍している橋本緑雨氏を私の川柳理論の対象にして、此のたびの稿を進めようとするのであるが、それは決して偶然の思いつきではなかった。

今は川雑の至宝として洞友の地位に甘んじ時折の本社句会に顔を出す程度で、直接雑誌の運営にタッチしていない故最近の不朽洞会員達からは気づかぬ存在になっているが、この唯一人生き残りの大先輩は現在見た目ではムツリ緑雨として沈黙の蔭にいて頭上は燦然として光る。

但し緑雨の柳歴は路郎師とその「川柳雑誌」の中にも織り込まれているが、川雑創刊以前に懸けること一年前から当時勤務していた市電交通局の職域川柳誌「以交」吟社を声穂、啞人等と組み草版で出している。いわばそのへんにみる片々たる同人柳

誌に寄っていたのである。

一日、その頃阪神沿線の鳴尾に住む路郎宅を訪ねた声穂、啞人の懇望に漸く起った路郎師は、以交吟社の同人制度を廃し、謄写版印刷を活版に換え、路郎主幹を別格とした同人雑誌での月刊を標榜(当時、月刊の柳誌はなかった)その名も「川柳雑誌」と命名した。その大正十三年は菊池寛が綜合雑誌「文芸春秋」を創刊した年でもあった。路郎師は川雑創刊から一般社会人にも雑誌が売れることを念願としたのはその後間もなく川柳の社会化運動を動した点から考えても当然である。緑雨は師の意図を汲み、端書型ではあるが宣伝ポスターをバラ撒いて奔走した。一方創刊一カ年間は鳴尾で編集。その後を当時築港方面に住む緑雨の自宅で編集企画がなされ、その後幾多の変遷があり、昭和十一年七月、川柳不朽洞会が生まれ、「川柳雑誌」は路郎主幹の個

人経営となったが、それまでの緑雨の奮斗は並みなみならぬものがあつた。昭和十一年六月処女句集「街の雑音」を路郎居の不朽洞から出している。自序に曰く。

——私の作家生活は僅に十三年間で、路郎先生に師事いたしました「川柳雑誌」の創刊以来、雑誌の事にも微力を尽さしていただきましたが、その間……。

——集句二千余句の中から更に先生にお願ひして六百三十九句に削っていただきました。……

右の抄録によつて著者の作家生活は昭和十一年で十三カ年であるから、大正十三年の川雑創刊号より、現在までを推算すると三十七年間。その作品は凡て厳しい路郎点を經ぬものは一句たりとも無かつたものと考えられる。

元來緑雨の作品は、そのお人柄とともに非常に地味で句会なんかではあまり目立た

ない平々凡々たる存在である。従つて、抜句されることが少く、三光五客に入る場合があまりに無い。句会などで入選して自句を名のるときは低声の含み声で「ろくろ」とさも面倒くさそうである。いや寧ろ何の感情も動かない通常の声を出すだけだ。殊にたまたま選者になつて披露する時の披露ぶりが又邪魔くさそうであり、ぶつぶつ呟いて物を言うようにししか聴きとれない。好例が文蝶のように長く、ときに顛わして短歌のように朗誦すれば又雲雀のような綺麗な声で囁くように披露する潮花とは凡そ拙い無表情な緑雨の声にかかるかどうかんな名句でも、どれほど有名な作家でも、駄句といつしよに極読みにされてどんぐりの背くらべになつてしまふのだ。

然し句会とは川柳の作句道場だと神聖視するほど融通性のない私でもないが、その親睦と社交を兼ねる場として時にシヨウ的雰囲気をかますのは已を得ないことである。がさりとて選者の披露ぶりが、あんまり演出過剰になつて名優の科白氣取で一段と声を張り上げるなど、余り五七五の名調子を出してもらおうと句集に書かれた文学としての川柳を喪失してしまうくらいがある。

私は他誌にもたびたび書いたことであるが、端的にいって果して川柳を觀賞する場合、文字を通して読む(見る)ものであるか、声を通して感じる(聴く)ものである

か。然し元來、川柳はその川柳性から思えば庶民の声であり、それは歌であると同様に、私達は記録としての散文に、柳多留以の古川柳を視、且つ現代数百の柳誌に記載された数万の川柳を知る。そして庶民の声を直接耳に聴くことなく文学的記録として読もうとする。最早私達は本来の聴く川柳とは、身をもって句会などに出たときぐらいで大部分は川柳を読んで而して庶民の声を捜ろうとしているのである。

まして現代川柳人は川柳への文学意識をもつあまり、一部行き過ぎて本来の川柳性を見喪っているようにさえある。それは川柳から逸脱したものとして従來から私は警告を發していたものであった。（「川柳の座」五月号参照）

川柳の本質は庶民の声であり庶民とともにあるにしても、川柳それ自体は文字に規定された文学的には一等素朴な散文としての記録でしかない。ということも、既に私は述べたが、句会などで披露する場合、選者はともすれば、川柳の本質だけを感性として捉え、記録とか散文にある極少の文学としての川柳を抹殺しがちである。即ち川柳にある僅かながらの文学的主知にさえインポテントであるということ。つまり考える知性の無いことを指摘するのである。従って選者が入選句を發表するとすれ

ば、句主の思惑を度外視して己が感性で捉

えたペースに適して、川柳を歌う。私はそのことの良し悪しを今は問うのではないが、緑雨の披露ぶりが、不愛想であり、声が無表情であることは考えようによれば、それだけでなく庶民の声を再現するあまり、感情に走ろうとする川柳の歌を極力殺して、微かな川柳にもつ散文性をむしろ強調している風にもとれるのである。と思えたのは私だけの観察で、緑雨本人にしてみたら、別に取りたてて散文性を強調する意志が下心にあるとは受けとれず、その散文性それ自体、彼の地金であったかも知れないのである。

社会に対し何のゼスチュアもなく、人生への深刻な思わせぶりもなく、自己を粉飾する見せかけのない緑雨は、結局そのままの緑雨でしかなく、あるがままの緑雨があるがままの姿として現存するのは自然人間である。その彼が万一川柳作家として把握した庶民のもつ川柳とはどんなものであろうか。

私はさきに緑雨の披露ぶりを拙しと決め、そのこと自体が緑雨のあるがままの姿にある散文性で、実は彼の地金であるかも知れないと言ったが、そのように彼の地金とは凡そ音楽（時間）とは緑遠い散文精神を生れながらに持っているということであ

った。

散文精神とは中世の超現世的、神秘的文学に對して、現世的、經驗的なルネサンス以來の近代文学を一貫する特色であり、現実を尊重し、現世を正確に科学者のように取扱おうとする現実主義乃至は写実主義を裏付けたところの精神にはかならない。（小野十三郎）

ここに散文精神は既存する可視的なリアリズム思想としてみれば、詩的精神は不可視なロマンチズムとして対象される。

元來川柳とは庶民のものである限り、庶民が現に存在することは同時に川柳も亦既存するものであった。さすれば川柳は人間の本性に優位を置く詩的なものでなく、現実存在に価値をもつ散文精神でなければならなかった。

従來、私の詩川柳理論を樹立する為にはその対象とされる散文川柳を口にした。散文的精神による川柳であるということ。然し川柳の純粹性からすれば、川柳の頭にも散文をくっつけてわざわざ断るまでもないことであった。

即ち川柳とは詩のように内在的なものではなく、外在的な存在であったが為に、文学思潮にのせて散文精神をリアリズムと同義語化するのである。斯のとき外在的な散文（川柳）を作家の天性とするか、それは

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋しん

丹月堂

ちゆうやにんごん

散文精神による散文であり、川柳のための川柳としての純粹性に他ならない。

この場合に於ける作品からは、作家としての人間性を抽出することは不可能である。凡そ川柳が純粹であるためには知恵才覚をめぐらす自覚的人間であってはいけない。外在的自然とともに己も埋没してしまふ自然の人間としての純粹直感あるのみである。（フッサール）それは人間も亦「物」としての散文にみる俳句の世界観と通じるものであるかも知れない。緑雨の詠む叙景の句に

A 雨の宿山を眺めるばかり也

B 曲り角から急流になった水

C 池の水枯葉ばかりの底を見せ

のように、自然に對する受動的、靜的観察の立場をとったところの写実主義である。

と言ってしまっただけでは簡単にすぎて読者は物足らぬと思うので稍々詳しく説明しよう。

A句は緑雨作品としては比較的後期の作品であるが、句意は旅の宿にいて雨に降られたから窓外に目をやって雨の煙る山を望めるばかりであったと、旅の無聊を詠んだのである。この句は明らかにB、C句と違って作者は叙景を対象にして自分を喋っている。しかしこの句のモチーフは旅の雨であり、雨は宿と山の素材に降らして、旅する人間を配剤して句全体を自然的風景に撮りしとっている。既に作者は雨に宿と山をもつてきて旅人という自然的人間を読者に説明したのであった。

しかし、BやCはその説明すら必要とせず、作者は手をつかねたまま叙景に働きかけていない。ということは、急流になった河の水はそのまま河の水として観照し(B句)透きとおった池の水はそのまま池の水として句に撮して作者の主観がかけられも移入されていない。(C句)からである。しかし河の水が急流になるのは曲り角からであり、池の水は枯葉が底に見えるから透きとおっていると判断するところに川柳のもつ言葉の因果関係が俳句と相違する所以である。例えば「古池や蛙飛びこむ水の音」には古池、蛙、水のご概念は言葉とし

てはバラバラで結びつきがない。しかしこれを俳句の世界に取上げた時、初めて芭蕉のもつ化び寂びしほりを句全体から感得するのであって、古池だけ、蛙だけ、水の音だけからは感じられないだろう。換言すれば川柳は一つの素材を取り上げることによって主題に結びつく言葉の因果関係が生ずるが俳句の場合は一つ以上の素材の構成によって主題に結びつく言葉の因果を破ろうとする。

とまれ散文川柳作家橋本緑雨は沈黙の詩人として路郎門の第一人者でありながらユニークな存在である。その純粋性に於いて又その散文精神に於いて緑雨はいつ、いかなる場所にあつても黙して語らず、彼の作品は素材的リアリズムで彼の捉える素材は現実から拾いあげる視力に絶対のごまかしがない。

泣く人もなし靈柩車の早いこと
あの宿へ若い夫婦がはいったぞ
新聞屋読んで歩くは終ひなり
水道の音で書留またされる
真白い襟足に汗にじんで居
泣く人もなし靈柩車が早く走ったのは何故か、宿へはいった若夫婦とは？ 配達終つて歩く新聞屋、水道の音をさす印刷の主を得つ郵便屋、襟足の白さへ汗がにじんでいたから、にじんでいたと言ったまで。こ

の直視は緑雨自身とその身近かに於いても弛めることなく、寧ろ神のように正直でありのままで。しかも的確に記録はしても依然として作者は頑固に沈黙を守る。

企てに父は驚くまいことか
曲ると僕の姿が消える道だ
妹がうしろに居るとは知らなんだ
首あげてまだ元日は暗いなり
乗替へるまで父親に抱かれて居
質札がどんなものかとのぞきこみ
箸紙が見えて抽斗ぬけぬなり
女からコースをきめた手紙が米
美人とは君かいなど酔ふてゐる

等にもみる如く子の企てに驚いたから驚いたのであり、妹がうしろに居ると知らなかったから知らなかったと詠む正直さは、NO1の女給を掴えて、君が美人だと、酔が手伝つていや味を言ったとて、私は緑雨の正直さを疑うものでなく、緑雨にのつて高慢ちきな女給へ共に弥次りたくなつてくる。何故か？ そんなことを作者に訊くも野暮たく彼に代つて説明する私でもない。元且は首をあげてみて暗かったし、乗り替るまで親に抱かれて眠っていたなど。凡て至極当りまえのことを当

然のように詠む緑雨は、遂に「曲ると僕の姿が消える道だ」の句を詠んで、完全に己を詠んで己を消す散文精神による純客観の位置に立つリアリズムを打ち樹てたのであった。

★
当て字

(一三夫)

「飛白」この二字でなんと読みますか。若い人なら全然読めないと思う。では年配の方はどうでしょうか。ボクはテンデ手も足も出なかった。

蝙蝠(こうもり)この字など、どっちが上だったかな、と忘れるので「ヘンブク」と覚えるようにしていた。そこで「飛白」を、飛び飛びに白があるからカスリ(緋)と覚えるなんてムダなことだと思ふ。

「紺がすり」なら結構だれにでも読めるし「紺飛白」より感じも新鮮だとおもう。

スマートで
着心地のよい

O.S.K.
レディマード

株式会社 大坂商店
大阪府大阪市東区東町一丁目二番
電話 (94) 1745



アール・エッチ・

ブライズ教授と語る

—前田雀郎三十五句の英訳をお願いして—

阿部佐保蘭

元慶大教授堀英四郎先生のすすめで四月十七日午後六時半頃私は学習院舎宅のブライズ教授を思い切って初めて訪れた。最初にベルを押ししたが、通じないので、灯りの点いているピアノの音の聞える部屋へ今晚はと声をかけた。処ピアノの音が止って、やがてセータ一姿の方が直き直き玄関の扉を開けて下すった。中へ入った私は直感的に先生だなど感じて八年前に先生から戴いた私宛の手紙を差し出した処、その手紙を読まれた先生は、さあどうぞと先刻ピアノの音の聞えた応接間へ案内して下すった。初対面の挨拶をしてから私が八年前にその手紙に書いてある通

り、先生の出版された川柳英訳の書“Senryu-Japanese Satirical Verses” Translated and Explained by R. H. Blyth の中の雅号の誤りを訂正して、先生から御礼状を戴きすぐにも逢いたい、今は忙しいので、もう少し先にして欲しいとの事でありましたが、私もその当時は本業の再建に追われていた時でもあり、お伺いしたいの月日が経過していたことを申し上げると、先生も当時を回想され、初めてよく私を解って戴いたような気がしたのであった。私は八年前に買い求めた先生の川柳英訳の書を先生にお見せ

した処、この頃は幼稚だったと云われあと二ヵ月後に先生が出版される川柳の歴史の英訳の書は少しはよくなっていると思われるとの事であった。その他にももう一冊英訳の書が出版される予定だとも云われた。先生は女中さんの持つて来られた日本のお茶と最中をすすめられ、先生のお宅に十年もいられる実践女子大出の秘書の方を紹介して下すった。私は今日お伺いしたのは実は故前田雀郎先生が、死の直前書き残された自選の川柳三十五句の英訳を註訳入りで先生にお願いしに参りましたと心からお願ひした処、先生は気持ちよく私の願ひをOKして下さいたので

なく私の拙ない註訳（この註訳の中二句は大木笛我君の先生を憶う友情によるものであった）を感謝され、あなたの名前も入れましようと言って下さった。身に余る光栄であり、これもあれもみんな雀郎先生の遺徳の致す処と今更乍ら早逝された先生の死を心からお悼み申しあげた次第である。先生は海外放送で皇太子さんのことも川柳に詠まれ、ブライズ教授とも御懇意の間柄であられたらしく先生の告別式にブライズ教授の奥様が代理で来て下さった一事を見てもよく分ることではあった。ブライズ先生は又私は一般の外人がよくなさるように禪の研究から始ま

って、俳句の研究に移り、最後に川柳の研究に移行して来たとも云われた。

元慶大教授の堀英四郎先生が、ブライズ先生の川柳英訳の著書を推奨され、自らその本を五冊も買って懇意な外人にプレゼントされたことをお話すると、そうですかと心から喜ばれ、小生が川柳雑誌三〇三号に執筆した「堀英四郎先生と語る」——ブライズ教授の英訳川柳に就いて——をお見せすると、成程とうなずかれ、その本が欲しいとの事であったので後日麻生路郎先生に御手紙して貰って差しあげましょうと申しあげた処大変喜ばれた。雀郎自選三十五句を秘書に手渡され、秘書の方が読んでいられたが、やがて

子の手紙 前田雀郎様とあり

の箇所へ来て、この句面白いですね、と云われ、私もそうですねと全感、抒情派の第一人者で、実の処英訳し難い雀郎先生の句を英訳して下さるブライズさん（親しみの深さについてブライズさんと書かして戴いた辻生の御無礼をお許し下さい）に改めて感謝の念を深

くした次第である。この雀郎先生の自選三十五句の解説には不肖の私は大変面喰い、どうしても意味の充分に汲みとれない二句にぶつかり、川柳しなの

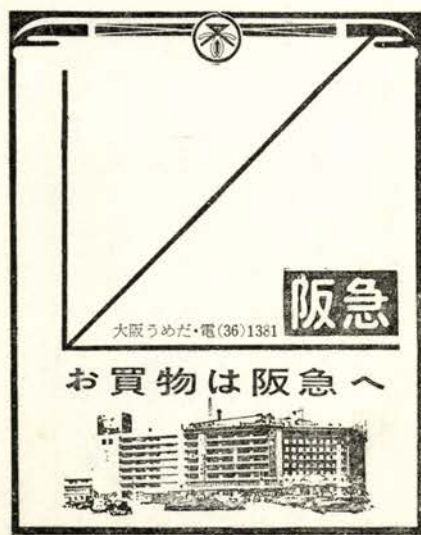
四月号に大方の援助を乞うた次第であるが、幸い先生直系の丹若会の大木笹我君の懇切なる解説を頂戴し、どうやらお茶を濁させて戴いた事を誌させて戴き、誌上から改めて笹我君並びにこれの幹旋の労をとられた石曾根民郎君に敬意と感謝の念を捧ぐる次第である。私はブライズ先生に感謝の余り、私が目下作製中の故雀郎先生案の川柳趣味浴衣（柳翁並びに柳多留の編者呉陵軒可有及び武玉川の点者慶紀逸三翁の生前座右に愛用せられし雅印を応用図案化せられ松坂屋の元図案部長佐々木晒骨先生が描かれた極上細真岡地を用いた紺地に白で字を浮出した川柳味横溢せし品）を出来上り次第先生にプレゼントする心組でいる事を申しあげた処、先生は喜んで下さり、私は身体が大きいから腕が出るかも知れない等と笑って話され、先生に着て戴けるん

でしたら、もう一反足してユキも揃えられるよう仕上げさせましょうと申しあげたら、有難うと愉快そうに笑って居られた。先生は黙って別室から

Haiku Volume 3 Summer-Autumn by R. H. Blyth を持って来られ、その扉に To Mr. Abe Saboran R. H. Blyth と自らサインされ、私に下さった。重ね重ねの感激に唯々川柳縁の有難さを柳翁に深謝するばかりであった。先生の奥様は我々全様日本の方とかがね聞いていたのであるが、当夜は所用で外出されていたので、遺憾乍らお目にかかれなかったが、先生は禪と俳句と川柳の英訳が唯一の趣味で、酒も煙草もたしなまれな

て、今晚は本当に有難うございましたとお別れの挨拶を述べると、そうですか、又是非遊びにいらして下さいと、愚妻に迄お菓子と言つづけられ先生自ら

玄関迄秘書の方と御一緒に見送って来て下さった。私は嬉しさの余り先生の手を握らせて下さいと申しあげると、黙って差し出された手、それは六十才を越えた方とは思われぬ柔らかく、温かい手を固く固く握り誠に深謝しますと、離し難い手を離して帰ろうとする、辻生を玄関から表迄お見送り下さり、秘書の方と一緒に先生に心から最敬礼して、先生が十四年間に棲んでいられたという学習院宿舎に惜しき別れを告げたのであった。（一九六〇、五、一九）



阪急
大阪うめだ・電(36)1381
お買物は阪急へ



謠曲と川柳

モニター報告の中から

後藤梅志

スタジオから、放送するほどの
甲斐性もないし、じっとしてい
ても、世の中の政治向きが良くなる
はずもないので、私は、さき頃ア
ルバイトにNHKのラジオ、モニ
ターを志願した。

期間は、三カ月だが、このモニ
ターという仕事は、仲々重労働で
毎日三つないし、四つの、与えら
れた番組をきき、その編集、アナ
ウンスの巧拙から、取材態度の良
しあしまで、具体的意見や苦言
を呈する。これを若い元氣な知識
人にまじって老人の小生がする。

少し厄介な仕事なのである。番組
は、朝七時廿分放送の「話の手
帖」の十五分間、上方邦楽選・「上
方百花選」・「謠曲狂言」といっ
た三十分間放送ものから、ニュ
ース・経済談話室のたぐいまで、
娯楽・演芸・教養など、毎日三つ
四つの番組が当てられている。

私は、謠曲の番組は専門だけに
他の番組とはやや趣きを異にし
て、良心的な報告を送ったが、面
白いことにこのモニターに対し
て、放送局側はあまり専門的な意

見はきらうのである。それはあた
り前の話で、聴取者の代表である
モニター報告に専門のことを云
われても、それは多くの場合、ひ
とり良がり的なものが多くて、放
送局は迷惑する。にも拘らず専門
的のことをモニターが云いたがる
というところは面白い心理状態であ
る。

これと同じことが、川柳の雑誌
などでよく散見する。それは「柳
論」というものが、非常に専門的
なものであって、長年作家生活を
やり、川柳道のうら表から、一般
なる常識まで知悉してなすべきで
あるのが当然であるにも拘らず、
単に筆が立つとか、少しばかり革
新的の意見があるというだけで、
大げらな意見を開陳する。これと
よく似ているのである。

中にはいい意見もあり、傾聴に
値する場合もあるが、経験豊富な
作家の頭には、すっぽり這入りか
ねる場合が多いし、いたずらに混
乱をひき起しやす性質のものが
あるから、ラジオモニター諸君の
陥りやすい弊害に顧みて、お互い

に注意せねばならぬということに
感じた。

閑話休題。私が謠曲の放送につ
いてどんなことを述べたかとい
うと、これがまた、川柳というもの
とよく似た場合があり、参考にも
なるうかと思うので、その報告の
模様をすこしくわしくご紹介す
る。

これは幾つかの「謠曲と狂言」
に対する報告の一つであるが、あ
る時、「巻絹」という曲を聴いた。
ところが、出演者は関西のさる大
家であったが、発音が明瞭でな
い。謠曲に於いては発音が正しい
ということは、不可欠の条件なの
であるが、その放送の場合には特
に強く不明瞭だと感じた。それを
感じ得たのは、私は専門家のこと
であるから、その「巻絹」という曲
は大部分暗記しているで、謠曲
の本を前に置かずして聴いている。
或は本を見ながら聴いていたので
は、気付かなかつたかも知れない
が、概して耳だけで聴く場合はカ
ンが冴えてくるものらしく、早速

モニター報告のネタが出来た訳で
ある。

『巻絹』という曲は目出たい曲
で、「或る年時の帝が霊夢を蒙り
給い、国々より千正の巻絹を熊野
権現に献上せしめたところ、都よ
りの分が延着した。官人怒って其
の使者を縛りしめたが其の時一人の
女神子が来り、この者は昨日
(きのう)音無の天神にて一首の
和歌を詠みわれに手向けし者なれ
ばとくとく其の縄を解くべしと
て、男に上の句を云わせ、女神子
は下の句を詠み継ぐ。かくて官人
の疑いも解けその縄を解けば神子
は和歌の徳を説き、祝詞(の)とを
上げ神楽を奏したるのち、袖霊
天に上らせたまい、神子は本性を
表わす」という内容であるが。放
送に於けるシテの詞「このものは
音無の天神にて」というところが
「彼(か)のもの」と耳に響く
のである。このものが、かのもの
では大ぶんのちがひがある。全々
気分を為さないのである。また、
シテのノリ地になって「証誠殿
(しようじょうでん)は阿弥陀如
来」というところは「ほうぜおで
んは」ときこえる。これは単に一
例に過ぎず、随所にこうした演者
特有の不明瞭さをもつ発音があっ
て、聴取を妨げられたのを感じた
から、率直に不満を表明して、以
来、謠曲の品位上、発音を明瞭に
マイクに乗せ得る楽師以外の出演
は見合せてほしい旨を述べた。な

ぜ私が発音をかくの如く八釜しく
云うかといえ、謠曲というものは
元来いささか含み声であって、
謠曲家以外の人には文句が聞き取
りにくいものであるが、これは謠
曲を普及せしめる上にも、共に日
常樂しむ上にも、致命的の缺陷と
なる慮れがあることを感ずるから
で、謠ひは元来、極めて発音を明
瞭にして感情を誦い分け、誰れに
も分るものにしなければ、発展は
しないことを信ずるからであ
る。

川柳の柳論の場合に於いても、
このことは同様である。しかし、
私の云うのはき違ひをされること
困ることがある。謠曲の場合で
は、発音の明瞭、不明瞭だけが問
題なのであって、元来謠曲に対し
て、理解する熱意も下地もない者
には、馬の耳に念仏で、分かる筈
もないのである。ただ分かるよう
に、分かるようにと云ったところ
で、分かるようにと云ったところ
で、分る易く文句を変えたり、
俗耳には入りやすい謠ひ方をし
ると云うのではない。こんなことは
分り切つていない筈なのに、謠曲
は分りにくいというところを片付
けたがる。これはとくにこの頃の
風潮のようにも思うが、はっきり
分りやすくと、言葉をかえれば、
正しく発音しろというのが、この
場合私の持論なのである。
川柳もまたこれとひとしく、ま
ぎらわしい、意味が二つにとれた
り、理解しにくい表現は避けなけ

ればいけない。独り良がりでは、困るのである。然し乍ら、より高度な句境というものがあって、社会経験に乏しく、鑑賞力の幼稚なものには、或る勝れた環境とか、高い句境は分かるものではない。こういう境地があつてこそ、これからの川柳の開ける道があるもので、誰れにも分かる句というものを下手にとられては、進歩はないと断定してもよい。鑑賞家もま



平言俗語の

冴え

秋 豆 崎 須

新聞小説などで、何だかどつつきにくい難波な文章だと、初めの一二回は辛抱して読んで見ると、どうもついて行けず、途中で投げて終うが、淡々と読み易い文体だと、ついスラスラっと読めて、ひとつの間に興味にひかれ、毎朝新聞がはいるのを待って、先ず小説から先きに目を通すというファンになって終います。

いるのか、さっぱりわかりませんが、それでも、志賀義雄ぐらゐな大物になると、流石は洗練されて居り、座談的な、おだやかな言い方をするから、その言わんとする主旨をよく理解出来ます。

今、「川柳雑誌」その他の柳話へ、「詩川柳」等のエッセイを発売して、柳界の脚光を浴びている高鷲里鈍さんのお兄さんで、詩人実業家の藤村雅光さんが、終戦直後に里鈍さんが出て居られた「詩文化」という詩の雑誌へ、次のようなことを書かれたことがあ

「……現代詩を書いているわれわれが読んでみても判りにくい、書いている自身ですら判りにくいのではないかと思われるようなものも決して少なくない……判りにくい判りにくい詩しか書けないようであれば、たれに見せても判るよな詩が書けるように、われわれももっと勉強しなくてはならない、……私は外国の油で天ぷらされた言葉の衣をひきはなして、われわれの生活から切り離すことのできない、普通の言葉で詩を書いてゆきたいと思う、それがあすの現代詩と言えらると思う。」

「普通の言葉」というのが、ピンと共鳴を呼ぶんです。詩に限らず、短歌でも、俳句でも、川柳でも、歯の浮くような新語や、キザな流行語とか、まだ消化し切れていない外来語をならべて、それこそ雅光さんの言われる通り、作者本人にさえ判っていないようなものを作り、それを又、批評家がいかに判っているかのような顔をして、褒めたてるのですから、誠に始末がわるいのです。いやに習性ぶつた、あくどい難文字を使わなくても、万人に判る平言俗語の冴えで、啄木はあれだけ立派な短歌を残しているではありませんか。

どの文学に於いてもそうであるが、特に短詩型文学に於いては、いかにしてその表現を平板にすべしかの努力が必要であるかを痛感

た、腰を低くして勉強してもらわなければならぬのである。しかし、謠曲でも、分かりにくい曲というものは、多くは、習い物と称して、許るしものすなわち難曲であり、活潑な感情の動きのある曲は、一般に、名曲として親しまれている。この辺は謠曲も川柳もあまりかわりはないということをかんじるのである。

「……現代詩を書いているわれわれが読んでみても判りにくい、書いている自身ですら判りにくいのではないかと思われるようなものも決して少なくない……判りにくい判りにくい詩しか書けないようであれば、たれに見せても判るよな詩が書けるように、われわれももっと勉強しなくてはならない、……私は外国の油で天ぷらされた言葉の衣をひきはなして、われわれの生活から切り離すことのできない、普通の言葉で詩を書いてゆきたいと思う、それがあすの現代詩と言えらると思う。」

「……現代詩を書いているわれわれが読んでみても判りにくい、書いている自身ですら判りにくいのではないかと思われるようなものも決して少なくない……判りにくい判りにくい詩しか書けないようであれば、たれに見せても判るよな詩が書けるように、われわれももっと勉強しなくてはならない、……私は外国の油で天ぷらされた言葉の衣をひきはなして、われわれの生活から切り離すことのできない、普通の言葉で詩を書いてゆきたいと思う、それがあすの現代詩と言えらると思う。」

「……現代詩を書いているわれわれが読んでみても判りにくい、書いている自身ですら判りにくいのではないかと思われるようなものも決して少なくない……判りにくい判りにくい詩しか書けないようであれば、たれに見せても判るよな詩が書けるように、われわれももっと勉強しなくてはならない、……私は外国の油で天ぷらされた言葉の衣をひきはなして、われわれの生活から切り離すことのできない、普通の言葉で詩を書いてゆきたいと思う、それがあすの現代詩と言えらると思う。」

「……現代詩を書いているわれわれが読んでみても判りにくい、書いている自身ですら判りにくいのではないかと思われるようなものも決して少なくない……判りにくい判りにくい詩しか書けないようであれば、たれに見せても判るよな詩が書けるように、われわれももっと勉強しなくてはならない、……私は外国の油で天ぷらされた言葉の衣をひきはなして、われわれの生活から切り離すことのできない、普通の言葉で詩を書いてゆきたいと思う、それがあすの現代詩と言えらると思う。」



デカンシヨで名高い川柳笹山支部の辨大無鬼氏と富士子さん

川柳夫婦善哉

(6)

— 無鬼と富士子 —

訪問者 丸尾 潮花

のを感じる。

「句集私達のなかにある句で一
寸気になる句があるんですがね。
鼻からをシヨールで巻いて待っ
てくれ

の句ですが、何か若い日の思い出
の句ではないかと思うのですが」

「その句は新婚時代のものなん
です。私が大阪の関西土地に務め
ていたころのことです。その頃は
笹山から大阪まで二時間半も汽車
がかかるものですから、大阪で下
宿をしていました。そして毎週土
曜日になると帰っていました」

「キッチリ帰って来られましたか」

「ええそれはキチンと帰って来
られました」

と富士子さんも下を向いて笑われ
る。

「その句を作った日は寒い夜で
した。迎えに来ているのだろうか
見たのですが居りません。来て呉
れなかったのかと思うで一才淋
しうなっていますと、シヨールを
鼻の上まで巻いて、電柱の蔭にか
くれて恥しそうに待っていました」

「奥さんはいいつもお迎えに出て
いられたのですか」

「ええそれに二日目には手紙を
出していました」

「下宿の小母さんがチャンと取

大阪駅から約二時間でデカンシ
ヨ節の本場丹波篠山に着く。

川柳四月号に、川柳まつり開始
以来の路郎賞受賞者がずらりと出
ていましたがその中に築山支部小
西無鬼さんの句に支部の皆さんも
其の日の思い出を新たにされたこ
とと思う。その折の

本店の平へ課長の如才なし
の入賞者小西無鬼さんは、川柳不
朽洞会の理事であり、多紀郡ボー
イスカウトの第一分団長であり、
町会議員の公職に毎日をお忙し
く、馳け廻っていられる。そして
富士子さんは川柳婦人友の会の理
事として創立以来活躍されている

お一人である。昭

和三十一年に私が
女流作家訪問を書
いた時、川柳を始
められた動機につ

いてご主人の趣味に同化したいか
らとおっしゃっていられた。女性
だからと言って家庭の殻に閉じこ
もっていたら、視野のせまい尖り
切ったものになってしまう。その
ためにも作句をすると言うことは
いいことだと思っていると行って
いられたが、

「孫が二人になりましたし、店
を見ていますとね。会にも出席が
出来にくくなりましたね」

「川柳まつりの受賞句なんです

が、あの句は出題されると同時に
作句されたものなんでしょうか」

「連うんです。他に投句する句
は作っていましたが、投句する間

際になって思いついた句です。私

も社員生活をしていましたし、此
の題だけはピッタリと来るものが
ありましたので、自信をもって投
句はしたのです。天位に抜けて楯
を笹山支部が貰いました時は感激
しましたね、ホントに嬉しかった
ですよ」と其の当時を今一度胸に

呼び返してはは笑まれる。
「投句される時奥さんはご覧に
なりましたか」

「私は見ませんでした。見せも
しませんでしたが、天位に入った
と聞きまして時は嬉しかったで
す。けれど何か反感を買いはしな
いかと、一寸心配をしました」

すると無鬼さんが、

「いつでも思うことですが、路
郎先生の選に抜ける句は川柳塔に
しましても、ピンと胸に来るもの
がありますね。厳選されるだけに

余計にいい句がありますね。支部
でもこうして本当にいい句だけを
厳選しなければと思うのですが、
どうしましても誌面を賑かにする
ために、営業みたいになりました
ね。初心者の方の作品を一句でも
多く誌上にのせてあげたいと思っ
ますので、つい寛選になりました
て、此の点作句の向上にも是非私
達は考えなければならぬと思っ
ています」

一昨年笹山支部創立十周年の記
念大会で霞乃先生を迎えられて盛
大に催された支部長としては当然
考えていられることと思う。あと
二、三カ月にして支部の花形左文
字君が若屋に移られることも憂慮
されていられた。しかし笹山支部
には、ひか平君や白猫児君その他
優秀な作家が居られることを思う
と、此の後の笹山支部に力強いも

っておいて、お手紙が来てますよと渡して呉れていました。今日あたり手紙が来る頃やなあと待っているものですから、嬉しかったですよ。今は辛い物ですがあの頃は甘いものが好きでして一日に三回ぐらいせんざいと、亀山を喰べに行っていました」

「綺麗な娘さんが居たのと違いますか」

「せんざい屋には居りませんでしたが、喫茶店には可愛い娘が居りました。家内には告白はしてませんけど」と奥さんの顔をうかがわれる。

「今は辛いものがなかったら、たまらないのです」とは富士子さんのお言葉。

「別居生活をしていられたのは何年ぐらいでした」

「二年ぐらいでしょうか。そのために新婚時代は他の方達より長かったと言えるでしょうね。

バックミラーに遠慮えしゃくもない二人

が其の頃の富士子さんの句ではないでしょうか

「退職以来家内に養うて貰うているようなものです」と世間並な事を言われる無鬼さんにはどことなく仕合せそうに見うけられる。奥さんのご趣味をお尋ねすると

「家内が私に三味線がいいか、

お琴がいいか。と聞くもんですから、琴の方は優雅だし、若し三味線が好きだと言ったら遊んでるなと思われても困るしと思ひ、色々を気を使う末に琴がいいと言うと、家内が三味線三月三日と言うのです。あとで三味線の方がいいと言うてやれば喜んだらうと思ひましてね」と言われる様に富士子さんは琴も弾かれるが三味線もお好きであり、踊りは花柳流をたしなんでいられる。



呼び名とよびかけ

松江梅里

鮮やかに弾く税吏の小憎らしの富士子さんの句を見るところのお氣持がわかる様に思える。

「夫婦善哉を毎号拝見していますと、夫婦川柳家と言うものは生々庵先生を振出しにどこもうちと同じように奥さんの方がしつかりしていられますな。女と言うものは、本当にきつい時がありますよ。うっかりしてたら、あんじょう乗じられてしまう時がありますよ」

カメラ・村山光輪

先日友人の娘の結婚式に招かれたとき親戚代表で、大学教授のSが近頃型破りの愉快な挨拶をされた。実はわたしも常に関心を持っていて少しくうけ売りとしてミックスを紹介する。新婚夫婦が第三者に対して自分の結婚相手のことをいうのにどんな言葉をつかうか、注意してきいているとなかなかおもしろい。一生けんめい新し

い人間関係を橋立しようとしている努力のあとが、テレクささの中間にうかがわれて、ほほえましいものがある。

夫が妻のことを云うのにいちばん多いのはやはり「家内」だ。「女房」と云う人も少なくない。少し古くなると「ウチのオバハン」と云うものもある。妻が夫のことを云うときにはやはり「主人」がいち

ばん普通で「宅」と云うのも「ウチ」のがとか「わたし」とか「あのひと」がとか云うのもある。庶民的なところでは「ウチのオッサン」がと云うひどいのもある。また戦前のインテリの間では姓を呼びすてにすることによって夫のことをあらわすと云う手ははやった。主人と云う呼び方はいかにも封建的な主従関係をあらわすやうでいやだと云う意見もある。ところで新婚の夫婦はお互いに相手のことをなんとよんでいるのだろうか。これもべつにルールも何もないので、さまざま工夫がおこなわれている。わたしの句に「クン附けて呼ぶ新妻のハイを聞き」と云うのがある。皇太子はやはり自分のことを「ボク」で美智子妃には「キミ」といわれるやうである。最近はいだいにこの呼び方の家庭がふえているだろう。

「オイ」と云うのは不人気でおとろえつつある。小学一年生の子どもに先生が君のお母さんの名はとまきげば「オイ」ですと答えたとき云う笑い話もある。

わたしの知人で自分の細君のことを「オクサン」とよびかけているひともある。またわたしの長男など結婚して五年にもなるが君ともオイともヨシ子とも云わない。用事のあるときはわざわざそばま

で行って応対している。これは初めからくせのもので思ひきって勇氣を出してヨシ子と呼びすてにすればあとはなんでもないので、云いそびれるとなんだかてれくさいものである。子どもが出来てからはおたがいにおとうちゃんとか、おかあちゃんなどという云い方で呼んでいる。これなどは子どもも媒介によっておこなわれている。

近頃新しいタイプの家庭にはおたがい名前を呼びあう傾向がある。たとえば「タケヲさん」「ジュン子さん」という工合に。また「さん」のない場合もある。日本人の名前と云うものは全くぐあいのわるいもので必ずしも発音しやすくできていない。子どもの名をつけるときみんな字づらのことはかり考えて、音のひびきと云うことはあまり無関心である。署名用にはいかめしくてつごうがよいかも知れないが、呼び名としてはあまりにも音がきたないというのが少なくない。親をうらまずにはいられない。いまからでは遅すぎるから何か適当なニックネームでもつくることだ。結婚して子どもが生れたら名まえをつけるのに注意がかんじんだ。呼びやすい名にしてやらなければならぬ。それはわが子の未来の人間関係に対する

(第6回) 戸田古万

⑩ 日本国土の成立

このへんで日本の歴史に入っていきます。日本はやっと一万年位前に島国になったという事です。その前は大陸と地つづきだったらしく、日本をとりまく海の深さがそれを知らせてくれます。二〇〇メートルより浅いところが地つづきの部分でありまして、その海底や、日本の各地から掘り出された象の骨や陸上生



物の化石からそのことがいえるのです。その中に、日本骨類がみつかります。すなわちマンモスという寒い所に住む象とナウマンという熱い地方の象とがそれでありますが、これからしても、寒い時代とあつい時代のあったことがわかります。あつい時代になりますと、寒い時代にこのあたりをすっきりとおおっていた水がとけて海の水かさをふやしました。

その時から日本は島国となり、日本海や朝鮮海峡が出来たと申します。しかし人間がこの島に住んでいたかどうかはわかりません。先史時代といわれる時代です。

マンモスは王者の如く

死に絶える

⑪ 原日本人

有効な配慮となるにちがいない。わたしの幼な友達に福井谷五郎と云うのがある。五十を過ぎた今呼び名にも貫縁があるが子ども頃、谷五郎と云う名は相撲とりのような名だからかわれて自分の名を非常に卑下したと云うことを聞かされた。それと反対にわたしの文夫と云う名は子ども時は大へん呼びやすく可愛い子どもらしい名まえであるが、将来七十を越して文夫さんと呼ばれて白髪の老人が現われるとしたら実に滑稽なことだと思ふ。それでわたしは今後雅号で押すつもりである。雅号と云えばまた面白い話がある。かつてわたしが岡山の弓削川柳大に出席したことがある。その時に初めて岡山の柳人達に会った。梅里と云う名は文字からうける感覚は老人のように想像されるそうである。丁度水戸黄門を連想して白髪でも生やしているとも思つたらしく、実物は意外にも紅顔の美青年梅里であることで吃驚させたと云う事実がある。次におじいちゃんと呼び名をなんとか外にないものかお教え願いたい。青年梅里に孫が二人もあると云えば誰も信じない。おじいちゃんと呼ばれることは実にいやである。なんとか適当な呼び名がないものかと色々考えた末、先生と呼ばせるこ

とにした。なんの先生か知らんが近頃はあんまでも先生と呼ぶそうだから兎に角ほんとうのおじいちゃんになるまでは先生にしておこう。

医者ご

坊主

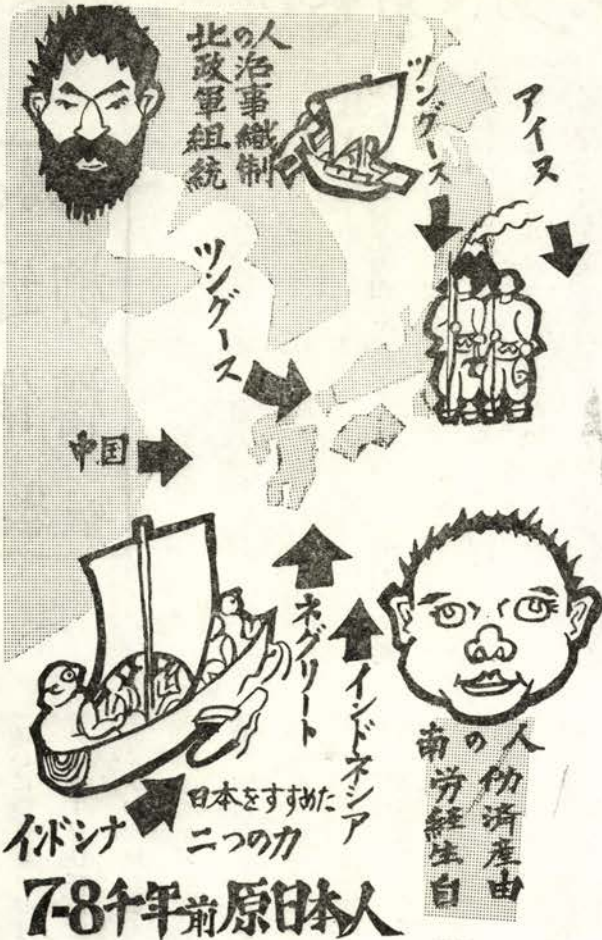
直原七面山

神主で学校の先生であるとか、また医者で絵画きであるとか、会社重役であつて小説家として名を知られているとか云つた風に、この世の中には、一人二役、一人三役をやつてのけている人も随分あります。医者と坊主の一人二役と云うようなケースはそうざらにはないでしょう。

で、この話題の主人公は、私の住んでいる川柳の町弓削から余り遠くないNという田舎町に住んでいて、年ももう六十に近い人なのですが、長男が京都の仏教大學を出て寺をついだ昭和二十八年五月頃まで、木当に長い間医者と坊主の一人二役をやつて来られたのです。

どうしてこう云うことになったのかと云いますと、なんでもこの

絵と川柳で表現する歴史



日本人の先祖に関して、以前はもっぱら北方説がとられていたようでありましたが、今日では南からも、北からも来たと考えられています。アイヌ・ツングース・ネグリト・インドネシア・インドシナ・シナなどが教えられ、それに順番までつけるのは、少しゆきすぎのように思われます。

七、八千年前から、いろいろの人間が住みはじめたようでありました。だから日本人は雑種であります。今さら混血問題をやかましくいうのもおかしいくらいです。

南からは丸木舟で、北からは筏で来ました。北は生産のとほしい地方、したがって、政治力が発達し、軍事力も強かったのです。南の人は生産技術に長じ、労働や経済で活動し、支配されながら、生産部門を受持つてゆきました。とにかく、南の人、北の人、ともに仲よく日本人になって、この国の生活をたのしみはじめたのでした。

神話に出てくる山の幸、海の幸の物語りはまさに、このことを私たちに教えておられます。記録にも、朝鮮半島や中国から大量の移住者のいたことが知られています。

○ 筏船団はるか火をふく
山を見る
見よう見まねで貝も
とりはじめ
釣針はせめられ無駄矢
せめられず

人のお父さんは寺つきのお坊さんで、立派な男の子が二人あり、長男(即ちこの人)が是非医者になりたいと云うのでその希望を入れてやり、次男に寺をつがせる積りで仏教学校にやっていたのですが、その次男は運悪く胸の病で亡くなってしまいました。

そこで仕方なく、お父さんはそのまま坊さんをつづけ、その人は町の病院を開業しました。

そして美しいお嫁さんを貰い、しかも次々と男の子ばかり三人も設けて、至って平和な年月を送っていたのですが、或る年のこと、お父さんは医者の子に脈を取ってもらうひまもなく、突然交通事故で昇天なさいました。

そこで檀家の人達と色々協議したのですが、結局三人の息子のなかの一人を必ずお坊さんにして寺の跡をつがせるという条件で、とうとう御自分がその開坊さんとして寺を守ると云うことになり、ここに初めて、世にもまれな医者とお坊主の一人二役と云う事態が発生したのでした。

幸いお経の方も子供の時からきびしく教えこまれていたのでさしおそまつもなく、良いおじゅつつあんで過して来られました。が、御本人に取っては、覚悟していたものと云うものの、心苦しい毎日を送って来られたようです。

例えば、山また山を越えた遠くの村の檀家などに重病人があった場合など、本当に、往診靴の中にコロモや敷珠を入れて出掛け、亡くなればとたんに変身し、次の日葬式をすませて帰って来ると云ったようなことも度々あって……。

私も一度招かれて、このお寺で川柳の講話をし、この方にも親しく接しておりますので、機を見て今一度お訪ねし、その頃のことを色々とお尋ねしてみたいものと思っております。その節はまた皆様にかせ出来るものと楽しみにしております。

雅号由来記

高野むじな

佐渡には狐がすまないと云われている。それは昔狐とむじなが互に勝負して狐が負けて島を追い出されたのだと云う伝説から来て居るらしい。事實は金山のふいごに使う炭を取る為むじなを保護した事に依るらしくむじなはたくさん居る。「佐渡むじな」と云う言葉があつて佐渡の人間はいかにもするい様に他國の人には解されている。前名(不二)が先取の方にあつたの二つと無い名を云う意味で「無二名」と書いてみたがかなの方がやつぱり書き良いし一句の中をさがすにも便利だつたのでむじなに通ずる意味で書き改めた。

「佐渡むじな」の名を汚すまいとして種分でも信用を挽回出来ればと云う願も含めて。



信仰に生きて化粧品も買わず	同	同	本心を遺書に書いたが生き残り	同
処女の身にヤイトをせいとす <small>すめら</small>	同	同	オールドミス嫁ぐ荷物に追越され	同
国賓が名誉博士をもろて去に <small>奈良市</small>	同	内海 敬太	賽銭が増える桜が咲き始め <small>玉野市</small>	同
当り前のことにも感謝する男	同	同	平和主義戦い取れと血を流し	同
葉師寺	同	同	あの歌のどこが良いのか母も年	同
アベックの七十五度に塔見上げ	同	同	長病みへつくしを見せて励まして <small>布施市</small>	同
雑魚寝さす宿がち <small>ちが</small> チップとり <small>西宮市</small>	同	樋口 寿栄	トランベツト二十の恋へす <small>す</small> 泣き	同
塩味のきいたむすびで花の下	同	同	事なかれ主義の顔です間のびして	同
日脚のびゆっくり帰る金はなし	同	同	実力の不足に触れず運を云い <small>西宮市</small>	同
空元気去んでくれたでほとする <small>神戸市</small>	同	恒成 鯉太	春の雨情緒に乏し療養所	同
もう仕事せよと桜の花が散り	同	同	やっと得た地位で批判的になり	同
老いて子に従えぬのが首を吊り	同	同	酒が出てからリベートの <small>ま</small> 合わせ <small>錦鹿市</small>	同
問屋をあさりデパートへ舞い戻り <small>丹波野市</small>	同	見本 泉洋	突き出したマイク十手に似た横暴	同
新薬の広告花の名所にも	同	同	百姓になる子が居ないアンケート	同
よう出来る息子を持ってへりく <small>く</small>	同	同	五六年はもつ建築用地の塀 <small>美祿市</small>	同
自家用車あるから老いの恋が出来 <small>加賀市</small>	同	木村 一路	甚仇を呼んで映画へ妻は行き	同
愛情は解るが誤字に引っかけかり	同	同	人間味捨てて出世の道を行く	同
嬉しさを隠しおうせぬ妻やよし	同	同	芸能人へ押すな押すなと押し寄 <small>ま</small> せ <small>ハワイ</small>	同
役目で云うたのが娘の縁談 <small>ま</small> ま <small>兵庫県</small>	同	河原みのる	フライ・エッグ・トースト <small>コッ</small> 朝の味	同
離れ家のよさは押売り寄りつかず	同	同	空腹がどうにも出来ぬ政治なり <small>ミシ</small> ス <small>コ</small>	同
春がすみ砂利採り昼寝して平和	同	同	入学金やっと揃えて酒にする	同
六三三四 大学院卒就職難 <small>利根野市</small>	同	坂東よしあき	花だより勘にさわるも決算期 <small>宮西市</small>	同
				三上 英路

の小芝漣子さんがしつように双葉関を押して居た。

又、区会議員の大胆那のお使いで、冠婚葬祭係りといった仕事を受け持って居た私は、八幡筋の山本米店の爺いさん（横綱大錦関の生家）と共に、道仁部内での顔といた存在であった。松竹の白井松さんのお宅、吉本のおせいさんなども見掛けたり、南の美妓の館、大阪歌舞伎俳優さんの館などもよく廻った。当時万よしの庄健一さん、田中藤作さんなども区会議員でなかったかと思う。周防町堺筋角の前府会議員、宮内電器のおっさんは、あれ程頼りない府会議員は今時にならないといわれたひょう／＼とした人であったし、虎屋信託の肥田熊蔵、亀村治郎兵衛さん宅などは、宮極米阪の折の宿舎となる大阪の豪商宅であった。亀村さんのおいになる人に亀村正治さんがあったと思う。初代ミスワカナ、玉松一郎の当り台本、ワカナの国防婦人会の作者でありユーモア作家として優れた人であった。万才の話で忘れられぬのは、私が終戦後住み付いた丹波篠山のA旅館に宿泊した、山中某なる人が、宿泊料をため、その取り立てに天王寺から平野線に乗り、尋ね乍ら探して行った処、その山中家の表札に並んで、秋田実の表札が出て居て驚いた事がある。勿論同姓の人であるか本人かは尋ねなかつたが、今を時めく万才作家の秋田さんがほんとうにその人の



ウエディングで！で老母は思いきり	同	飛び石連休を選挙運動に狩り出され	同	福田	祥男
水までも買って百姓田を作り	今治市	越智	一水	同	同
貧乏の自慢元氣な子が育ち	同	横山	一声	同	同
観光バスアイスクリームが待たせ	岡山県	同	同	同	同
百まで生きる会に入って頓死する	同	佐藤	まさる	同	同
子はテレビ夫は浮気妻は簿記	出雲市	同	同	同	同
珍客にされて土産がちと淋し	同	同	同	同	同
履歴書の吐息病歴何と消そ	鳥根県	同	同	同	同
見合かと帰省の肩を叩かれる	同	同	同	同	同
黄金の六十年の春の風	岡山県	同	同	同	同
金の要る話で一年中を生き	同	同	同	同	同
メートル法の時代に甲乙ある電話	兵庫県	同	同	同	同
せち辛い世に無職だと生きている	同	同	同	同	同
へその緒がとれても名前に迷い	倉吉市	同	同	同	同
そこらまで歩きたいよな服が出来	同	同	同	同	同
道普請観光バスに休まされ	倉敷市	同	同	同	同
扉越しの桜が春を楽しませ	同	同	同	同	同
定年になって自由を取り戻し	西宮市	同	同	同	同
花疲れ着替えもせずに足を投げ	同	同	同	同	同
病身の無職が人に羨やまれ	玉島市	同	同	同	同
六十年間違いだらけの娑婆に生き	同	同	同	同	同
		井上	旭峯		
		小倉美音子			
		村上	球絵		
		北鮮へ去ぬ友	太い声になり	大阪府	史風
		怒らせて泣かせた夜の畳こげ		徳山市	渡辺伊津志
		髪染めた少女に故郷遠ざかり		同	同
		あの頃で云われながらも夢を持ち		鳥取市	岩田八文銭
		砂風呂で肉体美とかを見て帰り		同	同
		気短かになって何んも気に入らず		竹原市	松井 可笑
		潜在の意識が酒の酔を借り		同	同
		あの頃に欲しかった夢孫に着せ		同	同
		四ん月の婆さんすねた声になり		同	同
		菜の花漬添えて茶粥のうまい野良		大阪府	高橋 尚史
		試験など運と思えと他人事		同	同
		往年の斗志と見えぬ低い腰		貝塚市	護川 梢月
		お愛想がひとつも云えぬ美粧院		岡山県	檀原 万女

二階に居られたのであろうか。
 その篠山のA旅館には花相撲に
 来た大鵬関が宿泊した。偶然とは
 云い乍ら面白いネタの一つであ
 る。色々と、とりとめもなく綴つ
 たが、少し有名人の名を並べ過ぎ
 たのは、少しでも大阪を知らぬ方
 々に名前から連想して大阪の当時
 を判って貰いたいが為に書いたの
 である。私はこんな事を書くより
 も、路郎先生の松阪クラブでの苦
 闘、高橋かほるさん達で代表され
 る、大阪的な作家が、頓プロのひ
 ととき、橋のたもと等で作句なさ
 れたであろう頃の、今はなき大阪
 の姿を、川柳時代の伏線として少
 しても思い出したかったからであ
 る。

反 省

私は最近気が付いたのである
 が、格言つまり、光陰は矢の如し
 とか、正直者は損をすとかいっ
 た昔からの格言を句に挿入して悦

福壽司

心斎橋筋大丸前
 電話の三三四四番



お隣りの秀才型のほうがぐれ	同	只で物あげるにこうも気をつかい	大阪市	藤富	淀月
子供でもあやすよに文鳥の <small>ひな</small> 育て	貝塚市	峠から降られて帰る雨男	同	同	同
鈍感で意気地なしねと女去り	同	ヒラリヒョリ臥てる間に花が散り	松江市	田中	妖人
吸がらの山に立っててまだ待つ気	芦屋市	うちの会社うちの会社と葬儀屋が	同	同	同
手のなかへたたま込んでる春 <small>しら</small> ル	同	幼稚園ババは当分放つとかれ	大阪市	宮原	敏子
一家四人医療券の一の客	伊丹市	角帽をたらい廻して撮っておき	同	同	同
女体にもう一つ女体あるよ <small>う</small> 乳房	同	寺の子は季節外れに餅を食べ	笠岡市	松本	忠三
南無大師平和と願う準四国	愛媛県	写す時は云うてと念には念を入れ	同	同	同
仕事着の桜は花に見てくれず	同	監督の眼が背に痛い初売場	大阪市	本村	文福
貰われていく子とバイバイと別れ	笠岡市	職安窓 口	同	同	同
札束によるめき仏はほっとかれ	同	求職票係の顔を選んで出し	同	同	同
生きていることを意識と吸う空気	山形県	寝ころんで山のさくらをほめち <small>り</small>	松江市	岡崎	祥月
百姓が邪魔ものにする春の雪	同	佃煮におかゆ重たい箸の音	同	同	同
急ぎ立てるように蕾へ花見客	岸和田市	バスの扉に倚り本性が金かぞえ	泉大津市	高津	紡毛
自供信用出来ぬと罪にしてくれず	同	キヤッチボール 停年近き日日を生く	同	同	同
アルミ貨を拾 <small>り</small> 八百屋値切ってる	布施市	衣食住足りて女房が物足りず	鳥取市	近藤	昭夫
幸福を乗せた遊覧バスが落ち	同	花の下音痴同士の唄になり	同	同	同
幸を世間知らずが愚痴になり	見島市	どこにどういるのかババは旅鳥	ハワイ	宮政	周防
割り切ってる妻で平和な日の続き	同	十代娘スカート 払けて邪魔がられ	ホノルル市	加東	黒頬
反対のための反対うれしい日	岡山県	通り抜け赤い毛氈欲しくなり	堺市	武田軍治郎	同
信用をしておりますと蔭で妬き	同	8ミリの中で楽しむだけの恋	岡山県	若柳花乃子	同

コーヒの味

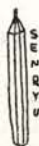
モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ☎ 6684

御集会には階上御利用下さい



にいて居たものだった。こんな事はいい事でないとか作句法でも注意されて居るのに、つい独善的な解釈で、何らかの手法でこれが句の根本をなして居た。

ところが、私の場合勿論雑詩であるが、こうした格言挿入の句が、路郎師達では抜けない事がやとと判って来たのである。

自分で意識して作る訳ではないのだが、考えて見れば至極安易な作句が出来るのであり、十年一日の如く、これでは進歩がない。

(地方句会では課題吟に於いても此れが大半を占めるのに驚く)。

私の場合、ルナールの博物誌、日記など内幕を見せて恐縮だが影響もある、一つでもいい、悪いと思う事は、思い切りよく止めるに越した事はない。



見学のミシン工場のにぎやかさ 天理市 新村 喜市
 今日の寒いやに熱いと嫁に無理 笠岡市 高浦 茶菜
 お給料の高さが男を軽んじる 金沢市 山本 木象
 紋服の力士缺で名が変り 茨木市 高木繁太郎
 鯉のぼり見上げる位置へ乳母車 愛媛県 一色泣太郎
 麦を踏むリズムもマンボになら 大阪府 橋本 裕邦
 花の宴おにぎりと云う療養所 貝塚市 辰己忠太朗
 プレゼント君を愛する目がやさし 宮崎県 野口卯之助
 制帽をぬぎ鳥打帽になる非番 大阪府 福井 昭
 女同士旅行でヒスを治して来 秋岡市 春田 鎮海
 花散って又新緑へ出て見たく 京都府 塚脇 笑太
 宝塚乙女の夢へ欠伸する 西宮市 藤田一本歯
 酔った時童顔になる恐い父 香川県 三井 酔夢
 鍵が錆び非常口など忘れられ 神戸市 吉田 隆史
 孫の顔たまに見るのに金がいり 小松市 月田北海坊
 噛みくだくように教えて娘は嫁ぎ 宇部市 鎮浪 翠月
 折詰が雨の桜を無理に見せ 笠岡市 谷本鈍愚坊
 たまさかに本社に寄れば他人めき 川西市 佐伯 九紫
 寂しさは老人病が一つ増え 和泉市 末田 晃康
 ダムすでに過去を忘れた水の色 竹原市 山内 静水
 還暦の記念写真は孫が撮り 大阪市 堤 勝三

一本の水仙女の部屋と知り 笠岡市 守屋衣里子
 土地売れて兄弟姉妹尋ねて来 西宮市 酒井 丹詠
 テレビ見て茶を飲んで借りて去に 大阪府 西本 保夫
 申されぬを記者は承知で知りた 秋岡市 小林 きみ
 雑魚同士人の出世の噂をし 兵庫県 斎藤たけお
 暇があり過ぎて新入り肩が凝り 大阪府 井上美恵子
 人文字のあのチョコポに居る君と僕 大阪府 中西兼治郎
 裕福に育って貧乏好きといい 西宮市 鵜飼 鮎子
 シューカーの中で札束踊ってる 豊田市 飯野仙台子
 なつかしい人へ思わず国なまり 竹原市 杉原 愛場
 鯉のぼり隣りへ浮気して泳ぎ 山口市 藤本 星二
 親玉をいだし給いて国の春 大阪府 稲森けい女
 居眠りの美人の首を肩にのせ 秋方市 福山えく保
 若返りしたPTAの投票日 大洲市 村田 淑滋
 無量寺でこれが今でも女なり 西宮市 川村 山友
 笑ってるうちにテレビも寝る時間 下関市 藤田 雪峰
 歌舞伎より安いとウール勧められ 豊中市 土井 北桐
 満開の一月早い造花店 大阪府 山田 蛙水
 子守唄褒めて勧誘員が来る 布施市 仲野 千里
 地藏堂新築保守党の地盤 青森県 木村 凉人
 叶わない願いださい銭止めておこ 岡山県 井元 美沙

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

20錠 300円
100錠 1,200円

リポコル

(12種の成分を配合)

ウロコ印

 阪田薬品

順風満帆のある時期が済むと、大半の作家がぶち当たる壁、あの悩みのある日、後藤極志さんから懇切なお手紙を頂き、どれ位嬉しかったことか。

以後、ぼつぼつであるが気を持ち直し作句を続けて居る私。

野望に満ちた闘志の時代は、既に過ぎ去ってしまったが、それだけに、川柳を忘れることはあるまいと思われる安定感を取り戻した。

あの頃の句はもう作れない、しかし、たった一本の手紙であったにしても(見失ったものを、私は今更取り戻したいよりは思わぬ)悩む私には何よりの得難い助力であったか、それは私だけの場合ではあるが、先輩と名の付く先生方の、色々の面での指導性を極力紙上で発表願ひ、指針として頂きたい。



(恩師から栄えの褒賞状を受ける東天紅氏・多久志氏撮影)

路郎賞に挑む柳界の祭典

川柳まつり

(第七回)

もえる師弟愛 たぎらす柳魂

— 会場 —

宝塚阪急旅行会館

柳界の最高峰麻生路郎先生のお誕生日を祝う川柳まつりが、みどり輝く宝塚で花々しく開催された。

このよき日、1960年5月15日。先生は明治二十一年(一八八八)七月十日に生れられ、お誕生日もかぞえて七十二回、それを祝う川柳まつりもむかえて第七回である。

七十二年のうち、その五十何年かを川柳と共に歩ゆみこられたことは、先生にも、また柳界にも大きな誇りである。

前夜の雨で緑葉いよいよ美しく、正にみどり滴る風情である。ここ宝塚阪急旅行会館の会場を、緑一色に包むすがすがしさに、柳趣いやがうえにも上がり、柳魂はのおとたぎる。

大会の常連、新日本放送の岩崎愛二氏

や、島根県の藤井明朗氏、石川県の伊藤茶仏氏、篠山の小西無鬼氏、酒井ひか平氏、河原みのる氏、畑小菊さんをはじめ、近県各地からぞくぞくご出席された。

名司会西尾榮氏には定評があり、万雷の拍手の中を、われらが師、路郎、復乃、天妻がしずしず縫って行かれるお姿と、先生の胸のピンクのバラがとても印象的だった。

まずプログラムは、生々庵副主幹の「挨拶」からはじまる。

挨拶 中島生々庵

『私は先頃武者小路実篤氏の小説を読みました。がその中に次のような一節がありました。』

「一日生きて居れば一日の感謝があり、それだけの仕事をしなければならぬ気になる。毎日が大事になり、何かしたくなる。自分の仕事に満足し切って居る人を見ると僕には低脳に思われる。満足出来ない処を少しずつ満足出来るよう努力する処が

面白い。大木が自分に満足して枝を伸ばすのを忘れたとしたらその大木は仕合せな大木ではない。どんな大木でも、もっと大木になりたいと思うところが面白い……」

私は近來の路郎先生の御生活を拝見して居りますと、この武者小路氏の言葉は全く先生のために書いた文章の様に思われて来ます」

と、先生のご健康を祝福し、この巨木である先生をただ「川柳雜誌社」の私有ではなく、全柳界のための貴重な存在であると語られた。

先生の柳話

先生はこのほかご喜色を満面にたたえ「こんなに皆さんから祝ってもらい、ほくほど幸福な人間はないと思う」と、会場の門下の人たちへ慈眼を向けられる。

「自分の最後は、原稿用紙の中へ顔をうずめて死ぬのだ」と、この席でも語られた。これは先生の文学精神というのであろうか。いつもそう念願されているようである。

る。

「しかし、それまでの天命は、でき得るかぎり大切にしたい」と言われるウラには、まだまだ仕事がかかっている、まだ死ぬえない。という川柳への意欲はごうもおとろえず、これからだ、これからだ、とご自身でムチを打たれ、先生にあるものは前進あるのみである。

「足が弱くなつてね」と、歯がゆそうに言われるが、

「自然というものは素直であるべきだ」と老齢というわが足へ感謝していられるようである。

「きょうご出席の愛二氏なども、非常に元気で壯者をしのぐ意気はあるが、やはり足はだいたい弱ってきている。人間の弱るの足から先きにくる」と、医家としてはなく、その体験から警告をされた。

「いままでおじいちゃん」とよばれると腹が立ったこともあったが、このごろでは孫も二人あり、自分もおじいさんらしくなつたので、この「自然」は認めるよ

うになった。梅里君や一三夫君が、また、「おじいちゃん」をイヤがっているが、そのうちにほくのように、「自然」を認めるときがくる」

と、会場の空気をほぐし、

「川柳をするにも不自然さは避けるべきで、あくまでも自然に詠み、句は素直な気持ちで作れ」と、三十分以上も熱弁をふるわれた。こうしたお元氣な声を、これからさき何年も何十年も拝聴したい願いは、これこそは全柳人の願いに通じるのである。

○ 席、兼題披露もスピーディにはこび、待望の特別課題は、先生ご自分で披露されることになった。前抜きからその一句、その一句へ異常なまでに緊張した顔、顔だ。その最後の一句、その息づまるような瞬間こそ、一年間の成果が語る努力のたまもの、湖界に大きな波紋を投げかけるときなのだ。

○ **まだ休みかと学生じやまにされ**

この作者の雅号は、その所属支部名は？と片ずをのむ。

川維浜寺支部、井阪東天紅氏が、ああ遂に60年度の大優勝楯をガツチリ握られたのである。

不朽洞杯は平沢保美氏と古豪尻目に新人の清新な熱にガイ歌があがったのである。

閉会の辞、黒川紫香氏から、閉会の辞、丸尾潮花氏が起つまで、ただ感激と昂奮の半日であった。

○ 不朽洞会新理事長に中島生々庵氏、副理

事長には若本多久志氏、松江梅里氏と首脳部が土井文輝氏ご病氣のため新就任されたことも発表された。来る四百号記念の九月号へまた遅しい前進がある。三氏の熱とご努力を期待し、ますます「命ある句」へつづく者の幸福を高めるのである。

(不田一三夫)

★ **懇親宴 (ナイター)**

先ず路郎先生の御健康を祝福する乾盃に懇親宴の幕は切って落された。

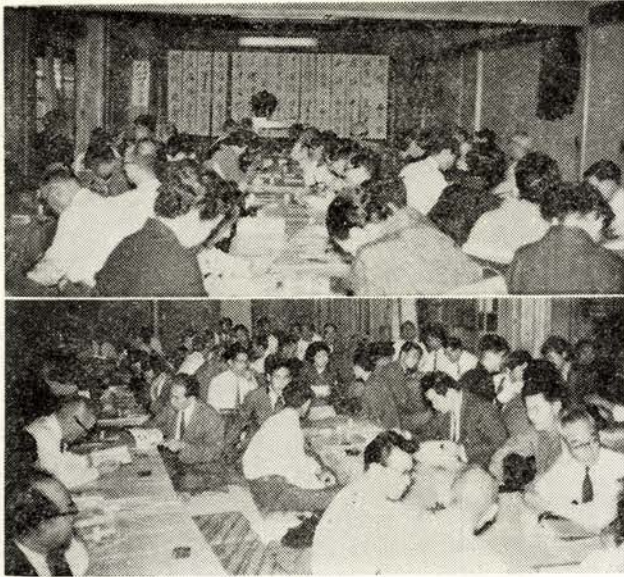
余興のトップバッターはお馴染み後藤梅志氏の謡曲「高砂」、朗々坐を圧す名調、

続いて里田一十氏の謡曲のダブルヘッド1、次にはお待兼ね、腹乃先生、生々庵理事長の小唄振り「五万石」銀鼠の色もすがすがしい紋服袴に白哲明眸の生々庵氏と並んで、楚々と立たれた腹乃先生、一瞬厳肅の感さえ覚えたが、さす手引く手の鮮やかさに一同恍惚の秘境に引き入れられる思いへ柔さんより「無形文化財や」との半畳が飛びやんやのカッサイ。次に岡田花奈さんの詩吟「富士山」太田良子女史の舞踊「さみだれ」むずむずしているひか平氏を押えて、篠山支部の御大無鬼氏登壇、デカンシヨ節に本場の味を満喫させられ又、篠山音頭の御披露。

代つては静馬氏の淡海節、西出一枝さん

の小唄も洩く、酒井清子さんの歌謡曲、井平氏の都々逸、女さんの歌謡曲。

(す、む氏撮影) 一会場をうずめる人々



川維の宴会重役岩崎愛二氏この時登壇せられ講義は皇太子殿下並に皇太子妃美智子殿下、千代八千代の御ちぎりの御噂まで拝聴出されたのも川維なればこそ有難さであった。

次は中島小石夫人の端唄舞、西いわを氏の「ゾオルガの船唄」さては瑞歩氏は二上り新内、次は川維の大家所、西尾榮氏の漫談、

川維の三角松、梅里さんの名調子「さのさ節」、節でこい文句でこいだ。最近特に枯淡味を増された腹乃先生の二回目は「八重一と重」から、春東氏が代られて、「酒は涙か溜息か」座席からは雅堂氏の土佐節が始まって、一同唱和。野球拳は老骨井平さんの独り勝ちに満場の拍手が起る。

○ こうして一堂は喜びのるつばにたぎっている内にも刻々ファイナルの時は迫りつつあったのだ。梅里氏の音頭で最後の万才三唱、宴終つて外に出れば、ほつりほつり、初夏の宵を物思わせる雨の序曲は静かに静にか奏でられていた。(真鍋一瓢)

- 出席者 路郎・明朗・女・没食子・杜的・す・む・客遊子・柳宏子・夢虹・豆秋・牧人・満秋・善風・薫風子・敬太・紫香・愛二・十悟・水客・三司・成男・恒明・いさむ・茶仏・鳩花・繁雄・凡九郎・博也・ひか平・千尋・昌男・旅風・雄声・圭三・圭井堂・徹也・舟遊・潮花・梅志・榮・雅堂・梅里・多久志・南宗・一三夫・奈良子・晃・白水・静馬・きさ子・古方・喬一・いわを・庸佑・木京・無鬼・小菊・みのる・半歩・知恵・黙平・鶴汀・史風・春葉・瑞歩・三舟・高史・花奈女・一瓢・阿茶・悦子・堰子・鮎子・九紫・生薑・敏明・井平・十四郎・守信・梨花・猛彦・花美・武助・操子・いづみ・月都・文秋・東天紅・生々庵・小石・栄・清子・一十・柳志・醉升・木堂・尚史・緑雨・与呂志・良子・孝風・花村・宏子・腹乃

(一席) まだ休みかと

学生じやまにされ

川維浜寺支部 井阪東天紅

(路那男両先生を随石門下の人々)



「学生」入選発表 特別課題

(二席) 子が無うて

学生さんの世話をやき

杏林 川柳会 山川 阿茶

(三席)

どうぞとも云わず

学生席をあけ

体温 川柳会 杉本 一鶴

(佳作)

凝りすぎた芸学生として置かず

川維婦人友の会 藤村 梨花

学生の味を末ッ子だけが知り

川維玉造支部 西田柳宏子

御曹司と知って学友そらさない

川維淀川支部 小島さぎす

売店の不覚は学生やと思ひ

川維阿倍野支部 伊達 堰子

密輸とは知らず手先の女学生

川維名古屋支部 神原 文鳥

(前抜)

学生を矢面に立て国貧し

川維昭和病院支部 橋高薫風子

袈裟かけた学生もあり京の街

川維西宮支部 若本多久志

秀才といわれ女を知らず病み

帝化 川柳会 永久 蒼芒

学生の眼を背に感じ巡査去に

川維宇都支部 平田 実男

学生の夫扶ける眉引いて

帝化 川柳会 永久 蒼芒

中学生そろそろ折り目気にしだし

川維篠山支部 河原みのる

投書欄学生いいたいことを言い

川維備前支部 永松 東岸

学資出す苦勞も知らず座り込み

川維西宮支部 小浜 牧人

学生の良識直線しか見えず

川維木次支部 藤井 明朗

口先の政治へ学徒体当り

帝化 川柳会 佐伯 九紫

角帽の夢は住友の平でよし

帝化 川柳会 深見 雅堂

学校へ何しに行っているピース

川維篠山支部 酒井ひか平

学生と云えどもマスクミ騒がせて

南海 川柳会 辻 圭木

アルバイト学生の本分忘れさせ

同 同

角帽の意気こん棒に負けていず

川維本社 藤井 月明

退社ベル学生になる手を洗い

川維西宮支部 若本多久志

女学生ところかまわず笑いこけ

川維本社 林 昌男

学生やさかいとヤンチャ見逃され

333 川柳会 石居 高志

偽学生ながら素直き眼に残り

川維玉造支部 城 正一

新婚は学生気分抜けきられず

川維大聖寺支部 長谷川美代

角帽を脱げば矢張り私の子

川維大聖寺支部 梅田 久雄

学生の窓函書館で肩並べ

体温 川柳会 辰見忠太朗

学生の気風抜けずに父は老い

川維大聖寺支部 石川素百々

学生の夢だんだんにしなびゆき

杏林 川柳会 中島 小石

校門で夫婦は違う科に別れ

川維岡山支部 林 葵丘

学生よ大志抱けと職がなし

川維本社 常岡 孝風

金ボタンストの応援にも出掛け

川維鳥取支部 河村 日満

学生と見えぬ姿で避暑地へ来

川維備前支部 永松 東岸

学生に笑われている処生衛

川維高知支部 宮田 壘

学生の朝の挨拶オスですみ

川維備前支部 尾田 水仙

女手に角帽きせて夢多し

川維婦人友の会 藤村 女

全学連肩で風切ることおぼえ

川維本社 武部 香林



麻生路郎賞受賞作決まる
60年度の栄冠は浜寺支部へ

女学生一人が泣けば次も泣き

川柳阿野野支部 木村 十悟

六十の手習いと云い定時制

帝化川柳会 佐伯 九紫

学生の鬨う姿無精ひげ

川柳京都支部 布部 幸男

学生に還れと政府策もなく

川柳宇都支部 田原 緑豊

学生のデモを麻疹として眺め

川柳宇都支部 安平次弘道

学生にかえれ国からきつい文

川柳宇都支部 奥富 天作

学生さんならと二階を見せて呉れ

川柳にしなり支部 本多 柳志

食うためのバイト卒業遙かなり

華川柳会 田中 妖人

学生もずい政治は見ておれず

川柳淀川支部 種谷 敏明

女学生活字の中で恋をする

川柳阿野野支部 春田 鎮海

学生の毛脛すがすがしきものうち

川柳大鉄支部 正本 水客

螢雪の功成り赤のお先棒

川柳ハワイ支部 築山快夢起

アルバイト学生帽を手ばなさず

川柳本社 仲どんたく

デモクラシー学生までがはきちがえ

川柳ハワイ支部 上田 紅溪

大学も帽子の格をうすれさし

川柳藤山支部 畑 小菊

学生も狸寝で行く満員車

川柳婦人友の会 吉川 悦子

十代と学ぶ夜間に籍を置き

川柳阿野野支部 伊達 聖子

女学生寄れば小鳥も眼を見張り

川柳ハワイ支部 市岡 睦舟

角ばって学生バイト頭さげ

川柳にしなり支部 櫛 蘭

世の中の裏も学んだアルバイト

川柳淀川支部 木村 木堂

飲むなどと知らず学資へ炭をやき

川柳大船支部 那谷 光郎

赤旗を振る学生にした政治

川柳宇都支部 田原 緑豊

学生へ蓋せば飲みぶりもう或人

川柳本社 室井八九寸

角帽をとって挨拶他人めき

川柳藤山支部 河原みのる

バイトする学生デモを黙殺す

川柳玉造支部 清水 白柳

学生のとときの語を見込まれる

川柳にしなり支部 後藤 梅志

落第をして学割でまた遊び

川柳本社 市場没食子

巡回の舎監と知らずデカンシヨ

川柳ハワイ支部 清水 茂太

ひややかにデモを見おろす理工系

川柳浜寺支部 吉田圭井堂

(順不同)

結婚はしても学生ママはいや

川柳倉敷支部 春名 香春

学生の気分に戻り野球拳

帝化川柳会 松下京一樓

盲学生の光るボタンがいじらしや

川柳備前支部 兼光 浄美

アルバイトだけではまだ買えぬ辞書

川柳明和院支部 林 夢虹

角帽がみんなやくざのように見え

川柳備前支部 横山 一声

野性味がどの学生も失せている

川柳ハワイ支部 三輪 峯円

白い手をして学生の労働歌

川柳明和院支部 吉本 菁風

林 夢虹

選後に

麻生路郎

川柳まつりの特別課題「学生」の応募は例によって海外から全国に及んでいる。なるべく多数に入選して欲しかったが、さて選となると、感情をさしはさむ訳にはいかない。数日を費やして慎重に優秀句を選出

したので、その点を諒とされたい。

第一席の井阪東天紅君は川柳浜寺支部の会員で、支部でのホープであった。最近まで羽曳野病院のどんぐりに属し、川村好

郎氏の指導の下に、ひたすら作句精進を続けていられたそうであるから、別記の優秀句が生れたのも決して偶然ではないと思

う。次に第一席から第三席までの短評を掲げて選者としての責をふさぐこととする。

一席―井阪東天紅君の「まだ休みかと学

生じゃまにされ」は軽い穿ちの句であり、ごく平易に詠まれていて難のない句である。川柳をむすかしく考え過ぎていた人たちへの一針の頂門だと云えよう。

二席―山川阿茶さんの「子が無うて学生さんの世話をやき」は子がないために何ん

となく淋びしい人生を送っている人が、学生の世話をやいて、いかに親らしい愛情をそそいで、自分の心の欠陥を充たそうとするさまが偲ばれる句である。

三席―杉本一鶴君の「どうぞとも云わず

学生席をあげ」の句は何んの奇もない表現で、しかも日常われわれがよく目に触れることを淡々と描出している写生句である

が、そこに学生の純朴さが浮彫りされていて、捨て難い句だと思

う。以上三句の外にも多数の佳句があったこととは選者として大変なよろこびであった。

今後ますます句作に精進され多くの優秀句を詠出されたい。

夢かごばかり

優勝楯獲得

川維浜寺支部

井阪東天紅

宝塚の夜

—夜明けを告げる

ライオンの咆哮—

須崎 豆秋

へゆかれる。また五六人のグループは一塊りになって夜の更けるのも知らず熱心に川柳談議に耽っていた。

少々残している。時折、物凄くライオン等の咆える声が静かな朝の冷気をひびかせている。家族組は早くから清荒神詣りや河原散歩と家庭サーブिसもめでたし、めでたしと云う所か……。

新緑の五月は私の一番すきな月である。詩情の湧くのもこの頃ではないだろうか。目に青葉山ホトトギスなんとやら、何にしても良い月である。目の中にとび込んでくる若葉の美しさ、さわやかな風。私は五月がすきだ。そして、私の幸運の月でもある。

羽曳野のどんぐり句会ではじめて川柳雑誌を知ったのも、川村好郎先生の知遇を得て川柳の手ほどきをうけたのも去年のこの月、先生から親しく指導を受けたことに一年、計らずも川維第七回川柳まつりに路郎先生からおほめをいただいて、益と正月が一しよに来たような思いです。

賞とか表彰とかおほめにあずかるのには凡そ縁とおい私がこの光栄に浴したのですから、全くもって、徹也氏の、

「感激の唯吐く息とすう息と」

その句そのままの感激であり、そして私の人生記録の一頁を飾ってくれるこの感激は川柳勉強の良い同伴者ともなってくれるでしょう。

川柳まつり前夜

小浜 牧人

寒しられた折からの雨も十四日の午后からすっきり上り薄陽ささして来て、雨に洗われた会場周辺の新緑が愈々映えてす

すがしい。年に一度の川柳まつりを明日に控えて天候が回復した事は何より嬉しい、路郎先生普段のお徳の賜であらう。

六時過ぎから一泊組の参加者が次々とお顔を見せる中にはお子さん連れで良いパパとなつて一泊するほほえましい家庭サーブिस組もある。会場では新副理事長梅里氏をはじめ紫香、水客、いさむ、豆秋、恒明、柳宏子、十悟、博也その他の諸氏が明日の準備に大奮である。折角の川柳まつり参加の方々に不備や手落ちがあつてはならないと準備に万全を期して、皆真けんな面持ちで手際よく涉つてゆく、八時頃慶乃先生宏子さん等が御見えになる。路郎先生は御身体に慎重を期せられて明朝御越しになる御予定とのこと。

やがて広間の正面一杯に明日の句会準備の貼紙が揚げられ万端の準備が終つたのは九時前であった。一風呂浴びて浴衣に着替えると初夏の夜風が肌を快よい、この前夜の楽しい雰囲気を一匂ものせんとし、ここで饒吟苦吟。柳人にとって捨て難い一刻である。中折には甚盤を囲んで黑白を争つている者、又折からは雷神巨人戦のテレビ実況を見て悠々と寛いでいる者等、川柳まつり前夜に相応しく思い思いに楽しい時を過ごしている。す、む、満秋、薫風子等は

大分おそくなって来場、広間に枕を並べて寝に就いたのは十一時頃であらうか、愛二氏は豪傑いびきをかくとかで御自分で別室

一泊組二十四名、宵のうち梅里さんが大会のピラやいろいろな書きものに、太い筆で遠筆をふるっている。他の者も、それぞれ明日の準備にいそがしい。

準備も一段落して食堂で会食、酒を呑もうという者が一人もいないという真面目さには驚いた。一風呂あびて、そろいの浴衣で大広間に横になって歓談。「天狗よせ」の座席で名句がとび出したりしてワイワイと楽しみ、十二時近くになって床をのべてもらい、修学旅行の生徒みたいに、大広間へ枕をならべて寝についた。ところで、二三の若い人達が真剣な川柳のはなしを交わし、それがボソボソと隣の動物園からライオンが夜明けを告げる、うなり声を出すまで、つづいて、眠れない人もあつたらしい。

さわやかな朝、上天気、さすがは「晴れ男」といわれているだけのことはある、先生のお祝い大会に、降った記録は無い。

宝塚の朝

西田 柳宏子

五時少し前、昨日の雨も名残惜し気に雲



賞品ご寄贈感謝 (敬称略)

- ▼(ネタルカゴ6) 小松園▼(テミの手提15) 光輪▼(風呂呂敷) 木客▼(ジニス・6) 一瓢▼(鉛筆) 水堂▼(コップ) 紫香▼(菓子・3) 恒明▼(石巻・6) 薫風子▼(時計・10) 慶天▼(湯呑・1) 梅里▼(手拭・10) (手拭三本一組) (シャツ) (財布・1) (洋服ブラシ・1) (靴スベリアラシセット) (財布セット) 多久志▼(民族・2) 古方▼(石巻・12) 日本▼(定期人・5) 潮▼(味噌漬・3) 無道▼(タオル・12) (ハンカチ・12) 一榮▼(瀬戸物セット) (ガラス器セット) (食卓セット) (盆・1) 形水▼(多数) 生々庵▼(多数) 善果。記載もれの方はお知らせ下さい

若葉に匂う人選句

兼題「腹案」 麻生路郎選

腹案が洩れていたとは露知らず 生薑
腹案を言わず議論をさす社長 孝風
腹案にあとの慰勞もぬかりなく 八九寸
腹案も三等重役秘めたまま 与呂志
腹案を練った文章でこれかいな 吉備郎
おもむろに社長の腹案とりつがれ 東天紅
金になる腹案だけを聞いておき 南宗
腹案へ桶つく損を知りながら 阿茶
尋平という経験の案が冴え 一三天
腹案も結局金の要る話 摩天郎
腹案を口止めされたタイピスト 旅風
腹案もありますからと社長逃げ 水京
末席の腹案社長の勘にふれ 庸佑
顔色を讀んで腹案しまい込み 鎮海
腹案があつてふんふん聞き流し 和楽
腹案もないのに話ませかえし 吸江
腹案を抱いて大江橋渡る 薰風子
呑みながら腹案ドクドク聞かされる 繁雄
腹案も言わずへまだけ叱りつけ 柳宏子
腹案も常識的で言いそびれ 菁風
腹案を9対1でもみ消され 梅里
腹案もない連中が酒をせき 同秋
腹案をはなせば妻がまずわらい 満人
腹案に巾を持たせていて策士 牧秋
腹案の先手先手を打つてくる 瑞歩
腹案をまず一ぱいできくり入れ 裕邦
腹案を隠して 課長意地悪く 醉舛
自家用の中で 腹案出米上り 柳志
腹案があつて言うだけ言わせて見 白柳
どうかなるなどと腹案ありそうに 紫香
腹案もないのにこてるだけこてる 木客
禅寺で腹案練ったことにする 瓢
お女将さんの腹案へ妓が純情過ぎ 一木堂
腹案の通りにすれば 赤字が出 多志
社長のメモ腹案が つまっとり

腹案は腹切る型で見せておき 生々庵
腹案を秘めて居眠りする会議 一十
腹案は儲かることになって 圭井堂
腹案の通りになって 苦勞する 舟遊
卒直に腹案言うてにらまれる 静馬
借智恵の腹案をそこら先は出さず 栗
荒れ模様腹案出そうか出そまいか 花乃子
腹案の先を争う 右派と左派 山椒坊
腹案をあげの腹案社長聞き流し 悦子
腹案をあつさりけなす妻の口 いさむ
腹案を同感したら頼まれた 保美
腹案があり末席を動かかない

兼題「洋酒」 北川春巢選

ジンファイズのおかち女酔う気なり 博也
別れ話降にこぼれたジンファイズ 千尋
女まだスネを見せないジンファイズ 吸江
いつわりの恋を聞いてもジンファイズ 美恵子
ホームバー開店甘いのが流行り 黙平
ホームバー一講釈聞かされる 花村
ホームバー下戸もグラスをもて見る 十四郎
足らぬと酌で間に合うホームバー 一十
奥さんのオンザロックで春の宵 どん瓢
随筆で稼ぐ教授のホームバー 清生
ホームバー洋酒の壘のコレクション 梅里
ホームバー洋酒と並ぶ養命酒 操子
ホームバー女虎も出来るにぎやか 阿茶
ホームバー変なカクテル飲まされる 一十
ホームバーお客の方が割つてくれ 圭井堂
ホームバー妻を見せたいのが本音 柳志
シエーカーも振つて奥さんいける 多志
道楽でシエーカーを振る御曹司 久久志
モーニング着て洋酒を運ぶ役 牧人
ラベルとは中味のちがう洋酒なり 摩天郎
ハイヒール洋酒も飲ける娘に育ち 旅風
制服が気焔をあげるトリスバー 繁太郎
ウオーターが一番うまい洋酒バー 東洋男
居酒屋の棚の洋酒は空ばかり 豆秋
居る木の洋酒党ベレーの似合う顔 愛二
胃袋へ消えたビール瓶の瓶の山 八九寸

パーティーの世辞をさかんにひとり飲む 灯子
美しい嘘がカクテルからこぼれ 昌男
酔さめがよろしと言うて洋酒のみ 瑞歩
ストリートでよいわとこい女の子 文秋
せめて洋酒の色彩をたのしまん 白柳
割切れぬ恋を五色の酒に酔い 鳩花
オールドの空瓶光る程に撫で 尚史
胃袋を持って洋酒を派手に飲み 文秋
ポケットに角瓶旅の心にす 秋山
ポケットに洋酒もゆれる花のバス 仙助
日本酒と洋酒に別れた交叉点 武月
ウイスキー舐めあやしげな踊り見る 紅月
重役と飲むウイスキー酔うてこず 木堂
シャンパンの音はなやみにブ更ける 奈良子
その恋はジンを煽つて目をつぶる 一路
ライバルを祝うシャンペン音が派手 猛彦
サントリーチトリトシャンと酔いがこず みのる
恋人が欲しい洋酒の色に酔い きさ子
角瓶をあけて夜行の疲れ言う 茶仏
到来の洋酒ラベルを拜まされ 雅堂
ハイボールへ打てば響くの足が向き 京一樓
ハイボール飲んでドラッグ派気あげ 蘭
ややくししい名のカクテル酔い心地 一鶴
にわか成金洋酒とやらも飲んで見 すむ
正宗の腹が洋酒を受けつけず 雅堂
押入れの中にホームバーが出来 月都
うかうかと甘い洋酒が入りすぎ 梅志
ペパーミントぐらゐ着つて手を握り 日満
あと口の洋酒で足をにたれたり 無鬼
骨の髄までも洋酒にしてやられ 雄谷
色愛したたけで洋酒の値が違い 日雄
ホワイホワイでえとど毒味ほど飲ませ 春満
ウイスキーなめなめ謀叛考える 巢

兼題「団体」 松江梅里選

団体が二つに切れた交叉点 静馬
団体の陳情へ知事の雲がくれ 夢虹
団体の来てて狐狼が好きと言う 凡九郎
台風のように 団体通ります 旅風
団体の一人トイレがおすすぎる 博也

団体の陳情秘書にあしらわれ 与呂志
団体の一人がゴテる宿の膳 三司
宵のうちだけ団体の中に居る 史風
団体はみんな疲れた顔で立ち 緑雨
頼まれもせぬ団体の世話をやき 半歩
団体の一人へマイク呼び続け 吸江
団体の強さで弱い肩を組み 小石
奥様の団体万事スローなり 日満
団体へよその一人が迷い込み 葉光
団体の旅は無邪気に歩かされ 茶仏
陳情団へ代理の代理つるされる 一鶴
団体の飲める同士が組んだ部屋 武助
団体は雨の雫も見て回り 明朗
団体の客のチップは当てにせず 三夫
青い目のお上りさんが羽田着 梅志
気のきかぬ団体がいて地下が混み 一木堂
団体の後三人に手がかり 雅堂
団体を先に追出すとうふ汁 圭井堂
獲もの見つけたら団体すつぽぬけ 生々庵
団体へ下戸異端者の縁にいる 梨花
団体の遊山夜汽車は眠らさず 井平
鉄杖にして団体を眺めたり 幽谷
団体を旗一本で連れ歩き 三舟
団体を呑んでお城に陽が落ちる すむ
団体の表通りを見て帰り 春巢
団体ができてべらぼうになり下り 日満
団体のレベルに合わすパスガイド 文秋
農協の団体らしい握り飯 紅月
金持ちの団体らしく豚もなく 正一
口銭のうすい団体無理を言い 木堂
此処や此処やと団体旗を上げ 京一樓
団体の酒はやかにで酌き回り 柳志
連休連休団体さんに疲れ切り 潮花
団体の旗はおつちよちよいが持ち 梨花
名苑かそうか団体無表情 梨秋
団体へ売切れましたゆで玉子 壘
団体を背負い気強く値切った 湖山
団体のよめき組は宿にいなす 阿茶
団体の来た税務署で気が強し 牧人

川柳まつり

団体が二つに割れてストに負け
 団体のおかけ舞妓に見送られ
 団体のみんなひねてる本願寺
 団体へ母をたのんで旅に出し
 団体でしてと逢えないことを詫
 団体へ驚駭りとは鳴りつづけ
 団体の恥書きとむ如意輪堂
 俗塵を撒いて 団体山を下り
 団体がきて釣鐘を着にする
 団体が下見二人で来るつもり

兼題「おしやべり」 須崎豆秋選

ようしやべるやちと電話待つている
 しやべるだけしやべって女スーとする
 おもとを縫うてやりたいほどしやべり
 おしやべりがやんでるときは食べてはり
 忙しい日におしやべりに坐られる
 かんじんな時は喋らずあはかない
 ハイキングおしやべり遅れ勝に来る
 アイスクリーム買つておしやべりおれず
 おしやべりが好きでガイドをして居ます
 おしやべりをストップさせた子あつこ
 誰にも云うとおしやべり念を押し
 おしやべりの妻に押売負けていし
 お喋舌りのつときは明日にし帰る
 おしやべりの二人の影も長うなり
 さよならをせよとおしやべりまたつづき
 おしやべりへ茶柱立つたまんまめ
 口止めを貰うた事までもう喋り
 お茶受けを持っておしやべり上り去る
 おしやべるだけしやべり返事もかき去に
 改札をはさみおしやべりまだ続き
 生理的なのか女のよくしやべり
 おしやべりの合槌編みの目をとほし
 天ぶらを食たなど思うほど喋り
 長屋では放送局というあだ名
 おしやべりをそつとかわした市場籠
 おしやべりの洗濯空が曇つて来
 おしやべりへフフフフのたよりなき

おしやべりが程度のひくい事を云い
 パス追いかけて追いかけておしやべりまだ続け
 おしやべりの聞いていようといまいと
 おしやべりを封じる船を出しておき
 おしやべりが何云うたやらも忘れ
 おしやべりの相手に困る子をあやし
 幕間いを右も左もよくしやべり
 話又一に喋つたて云う顔になり
 ちよつとぐらゐ黙つとれんかと叱られた
 おしやべりが途切れ車窓に富士の雪
 おしやべりがもう知つて居る早い耳
 井戸端が無くとも女というものは
 おしやべりで百鳥とあんなな附けられる
 おしやべりの視線をもらし時計見る
 上役の留守おしやべりの派手な事務
 おしやべりをしながら女探り合
 日が西に落ちておしやべりあてきせ
 おしやべりを心得えた大横になり
 発車ベル鳴つて居るのまだ喋べり
 おしやべりと内申書にも書かれど
 おしやべりは相手の返事もしてしやべり
 肝腎な事をおしやべり忘れて居
 おしやべりに試験勉強居たまらず
 おしやべりに踏まれたまの春の草
 おしやべりがやんでひつそり鳩時計
 蚊柱のようにおしやべり近づきぬ
 同窓会出世したのがよく喋り
 尼の若さへ喋れば喋る口を持ち
 おしやべりを使ひに出して待ち破れ
 証人にされしやべり今日は歯が痛み
 おしやべりの淋しやべり今日は歯が痛み
 善人だなどおしやべりを聞いて
 おしやべりが帰つてお通夜寒うなり
 おしやべりへ降つて来たよ子が知らせ
 おしやべりの御きげん損ねるとする
 おしやべりは地球が廻るのを忘れ
 おしやべりの水は溶けて水になり

梅志 幽馬 潮花 恒明 文秋 鶉汀 十梧 正一 高志 竹荘 三司 徹也 廣天 圭三 みのる 黙平 春巢 奈良子 尚史 京一 十梧 多志 久志 東洋 吸江

白柳 生々庵 晃石 小茶 阿雨 緑志 梅志 無鬼 恒明 九紫 東天紅 善風 梅里 孝風 真奇 湖山 紅平 庸佑 一三夫 八九才 明朗 旅風 美恵子 古方 女客 木客 日満 妖人 晃馬 静村 花林 香敏 豆秋

兼題「素っば抜き」 若本多久志選

素っば抜くくせが出世の邪魔になり
 素っば抜き社運ゆきぶる記事となり
 素っば抜きえらい女にひつかり
 素っばぬきちと行き過ぎたことに悔い
 へそくりのありかを坊や素っばぬき
 素っば抜き三流らしくほけており
 情熱はすつば抜くのに首をかけ
 裏切つた腹いせみんな素っば抜き
 素っば抜くという原稿を買わされる
 素っば抜くくせという原稿を買わされる
 分前の事からあれを素っば抜き
 仲間割れあはな事まで素っば抜き
 小説ということにした素っば抜き
 云い負けて妻のへそり素っば抜き
 映画話で素っば抜きされた式を挙げ
 素っば抜きが四段埋める素っば抜き
 素っば抜きが四段埋める素っば抜き
 紋付の紋の違いを指摘され
 人の恋尾にひれつけて素っば抜き
 素っば抜きかれても元の恋はまき
 素っば抜きくわよと妓に膝つねられる
 小數派を小躍させた素っば抜き
 素っば抜き某大官もまき込まれ
 赤旗が会社の経理素っば抜き
 素っば抜きが原稿太い字が走り
 アハハハ素っば抜きと反りかえり
 素っば抜きといふて恐ろがり慰きめる
 素っば抜きき予期した議長うらたま
 素っば抜ききだけで売れる週刊誌
 自殺までも知らず素っば抜き
 さまざま素っば抜きされた本籍地
 すつば抜き以来の敬遠だと気付き
 肚癒せという素っば抜きあくとす
 お隣りのしやべりが妻へ素っば抜き
 素っばぬかれた気の毒なほどうらま
 買つて来た魚籃のまなを素っば抜き
 素っば抜き秘書課に軽くあしらわれ
 素っば抜きいてやるぞと少しおさら
 すつば抜きを笑いまさらす程に練れ

春巢 一瓢 恒明 梅里 十四郎 裕邦 可住 南宗 清生 月明 没食子 八九才 蛙木 堰子 奈良子 東洋男 幽谷 晃鶴 一潮 光郎 岸風 雄声 丸紫 牧人 湖山 文都 月都 文秋 小石 日満 阿茶 梨花 柳宏子 水堂 生堂 圭井堂 茶仏 すむ 一十

素っば抜きかれて煙草の輪がくずれ
 素っば抜きされて気がまた上り
 素っば抜き子はその意味を知つて
 花婿が素っば抜きされる嬉し
 五重九の作文親のこと素っば抜き
 素っば抜きくつもりでなく素っば抜き
 素っば抜きかれてから二人腕を組み
 素っば抜ききときに正義も道ならず
 素っば抜ききお膳の上にあるほろ
 素っば抜きき敏に廻せば怖い奴
 素っば抜きかれても社長のとほけ顔
 素っば抜きき女はこわいものとする
 身軽るきは素っば抜きかれてからの事
 虫も殺さぬ表情で素っば抜き
 素っば抜ききた友達がひとり減り
 二本目を通してからの裏話
 段取りの順そのまま素っば抜き
 素っば抜き後味悪いものと知り
 米客へ廻らぬ舌が素っば抜き
 大臣の度肝を抜いた素っば抜き
 妬心フト仲居がもらすスキヤン
 素っば抜き抜き彼も人間だつたらし

雅堂 奈良子 灯子 高志 萊春 梅志 夢秋 満秋 陽光 昌男 生々庵 千尋 旅風 水客 古方 静馬 柳宏子 紅月 三司 多久志

兼題「自信」 後藤梅志選

恐るべき自信女優になるつもり
 働いて何が何でも食う自信
 女房を持って自信がつきはじめ
 自信いまアイチを画くホームラン
 女房に尻叩かれて来た自信
 家元の自信ゆする事が出来
 自信無いのんか鉛筆よく削り
 好かれてる自信トシの甘えよう
 十俵は獲れた自信へ台風が吹き
 競輪の自信危ない橋わたり
 自信ない態度で油断さそうなり
 自信ある顔もチラホラ試験場
 自信ない発言舌尾が消えている
 自信ある入試一人で受けにゆき
 日本髪結うて自信のない枕
 自信あり背の視線へ振り向かず

十四郎 一瓢 鶴汀 すむ 恒明 博也 客遊子 月都 幽谷 壘 圭水 三舟 花美 阿茶 奈良子 紅月

川柳まつり

代議士として妻として生き迷い千尋
母の日の女代議士母になりきさ子
政治家が志望と聞いてさめた恋 圭井堂

席題「政治家」 伊藤茶仏選

端麗の自信モデルになるという
総評の自信三池でひびが入り 日満
自信持つパットをくぐるピンボール
バチンコで稼ぐ自信の懐手 蒼芒
ありあまる自信が文句ばかり言い
口笛でケロリと入試戻って来 十哲
賑気楼のように自信が湧き崩れ 光郎
札束に男の自信たじろがず 青風
自信あり神音心も怠らさ 堀子
自信がないのでさっさと嫁にゆき 生薑
はめられてちよっと自信がついて来た
自信ある言葉も親は不安がり 六童子
酒の外自信のもてる事がなし 牧人
経営の自信がつけば定年か 小石
自信のある顔で冷い瞳が光り 栄
手術台ダイナミックなメスさばき 一栄
時流には媚びぬ自信が不遇にし 柳家子
七転びしても自信を失わず どんたく
まだ生きる自信が老いを頑固にし 花村
しゃべる自信もでて社長の肥りかけ 妖人
明日入試自信をもって宵から寝 清生
別居して自信が少し崩れかけ 豆秋
子の自信模倣機空の青泳ぐ 八九寸
新婚の自信有りそなきそうな 小鎮
自信ある前途愉快にたのもしく 小菊
胃に自信あつてお粥を食う不運 吸江
その自信にいとみかかってきた 古方
金で済む自信が事件をこじらせる 圭井堂
悪評も自信の一つ金を溜め 一路
後の世になればわかるという自信 兎
先生が笑って子供に自信つき 兎
飛ぶように飛んで自信がつかさじき 兎
大嫁して子供の自信に負けおけ 水客
どことなく自信あり気な馬に賭け 旅風
呼吸深く吸って自信をたしかめる 梅志

息抜きに階段からころげ落ち 愛二
息抜きのそばへ眼鏡を拭きなおし 杜的

席題「息抜き」 小西無鬼選

お手盛りへ政治家多少気がひける 博也
歳費値上反対をする一人あり 一十
政治家の仕掛けがあつた硝子張り 旅風
親交会等と選挙にもう備え 杜的
帰りの飛行機延ばし政治家ぶって居り 一十
政治家がそれわからぬ金をくれ 春渠
政治家はそうかそうかと聞いてくれ 満秋
政治家の父と一月ぶりに会い 鶏司
一票になるを政治家見逃がさず 三司
政治家のはしれ記者におだてられ 庸佑
政治家の酔えばしきりと書きなぐり 博也
清濁合せ呑んで政治家らしく酔い 梅志
政治家の今日は反り身の質問日 生々庵
血税を喰い政治家としての旅 黙平
政治家の弱味握つている女将 潮花
赤坂で政治家として巾が出来 南宗
大臣が出た村中がわきかえり 半歩
がむしゃらに押し政治政治家に 梅志
政治屋と呼んで東光こきおろし 一瓢
コップ酒どの大臣も気に入らず 奈良子
スクラムの中で政治家顔を売り 千尋
請願の列へ政治家背をむける 史堂
落選をさされ政治家党を替え 博也
政治家の妻東京は未だ知らず 豆秋
政治家になるとはいわぬ子供の日 奈良子
焼香へまず政治家の名が呼ばれ 庸佑
郷土入りして政治家にそつがなし 三司
政治家でない幸福を覗るテレビ 雅堂
宰相の血筋をひいて筆で立ち 水客
御用辞で大政治家と云うてくれ 柳宏子
憲政の神篤農として知られ 柳宏子
明治には政治家のいた話する 柳宏子
デモ組んで父の政治へ抗議する 水客
政治家が大阪へ来て寄附が要り 操子
小まわりの効く政治家でこき使い 牧人
茶仏

息抜きの旅で別れたひとに逢い 潮花
息抜きの煙草がうまいビルの窓 雅堂

息抜きの課長は甘いものを買 牧人
息抜きをしに受付へやってくる 息抜き
息抜きに来いと新築海が見え 同
息抜きの旅でも子の事ハズ的事 小石
息抜きの来た湯の街も妬けるだけ 一瓢
息抜きにトイレへ立つとは淋しいお 月都
えらひ息抜き外孫をあつてがわれ 照平
白石のこころで息をぬくそぶり 照平
息抜きの温泉へ記者が追つて来る 昌男
息抜きにしては交通くど過ぎる 昌男
息抜きをしるとは他人さまが言う 水客
息抜きをしてそれからの慌てよう 水客
息抜きに出れば縁の陽がまぶし 秋
角曲り丁稚ははっと息を抜き 秋
息抜きの禿を叩いて笑わせる 夢虹
息抜きの旅へ隣が騒ぎすぎ 夢虹
息抜きのこつも古参に仕込まれる 凡九郎
息抜きもせずエプロンの母の日よ 阿茶
たまさかの息抜きへギョットする電報 一栄
息抜きに似たよろめきが大きすぎ 客遊子
息抜きのスタンドバーは独り 多久志
息抜きに裏へまわれば息を抜き 多久志
息抜きは横丁のバーの隅に居り 一瓢
息抜きにきたなと二男思えども 一三夫
息抜きへ道頓堀の灯がさそい 鳩花
ご馳走をした息抜きに孫を見せ 鳩花
息抜きの行儀窓から見付けられ 梅志
息抜いた手ごたえ先辨知っている ひか平
息抜きに庭の若葉を見て飽かず 与呂志
息抜きにする気女房を旅へ出し 一十
息抜きがしたいビールを掲げてる 鶴汀
息抜いた隙へよろめき微笑する 梅志
息抜きのビールが顔に出て困り 舟遊
人生の息抜き閑職もありがたし 舟遊
息抜きのビールを顔に出て困り 茶仏
息抜きの解らぬ曲を聞いている 茶仏
息抜きの旅フランスへ漂然と 豆彦
息抜きの旅で別れたひとに逢い 豆彦
息抜きの煙草がうまいビルの窓 潮花

息抜きの煙草へマツチ湿つてる 無鬼
(清記・河井庸佑)

息抜きの温泉でもう家が恋しなり 照平
息抜きもならず定年来てしま 照平
すり切れたらあかんと悪友誘いに来 木客
職場にも息抜きがあり日々 清子
息抜いたとこで三味線の糸が切れ 白水
息抜きに二号とこんびれ詣りする 阿茶
息抜きがくたびれもうけになる休 豆秋
息抜きに湯下駄で回るスードショ 圭井堂
息抜きに来た温泉でくたびれる 夢虹
竿の先五寸に今日の息を抜き 夢虹
新入社あわれ側で息を抜き 東天紅
息抜きも不粋女房がついて来る 一瓢
息抜きにちよっとワイへ飛ぶ身分 十四郎
息抜きの温泉から帰つてあんま 静馬
息抜きの温泉が混んで居り 三司
息抜きに来た温泉は混んで居り 愛二
息抜きも兼ねてドックへ入るなり 菁風
息抜きのバフが忙しいトイレット 雅堂
息抜きに幹事張場へ来て話し 没食子
息抜きのお里帰りはぐちになり 多久志
息抜きのスードマンのぞく旅の宿 圭井堂
息抜きの旅行へフマンが付きま 武助
勉強の息抜き漫画読んで 文秋
息抜きに社長本宅へ戻つて来 柳志
貧しさの中に息抜く場所があり 千尋
息抜きの目が洗われる深緑 夢馬
息抜きに誘うて着物の愚痴言われ 静馬
息抜きに来た二男邸で薪を割り 雄声
息抜きへ課長もはいるあみだくじ 舟遊
息抜きに出よと雲雀の声を聞く 生薑
息抜きに積り留守居をかけて出る 生薑
息抜きの里に甘える母が居り 明
息抜きへおいでいとしんホール 鳩花
息抜きに来た母さんのしん張り 鳩花
どんぶり合つて一服吸い付ける 夢虹
息抜きへ女はルージュ引き直し 杜的
息抜きの旅は気ままなスケジュー 花奕
息抜きの煙草へマツチ湿つてる 夢虹
息抜きの煙草へマツチ湿つてる 夢虹



迷の選

・ 直原七面山 ・

の疑問点を聞いていただき、良いお知恵を拝借したいものと思ひ、ペンを取った次第であります。

で、その疑問点と申しますのは、例えばここに、川柳に非常に熱心で研究心に富み、あらゆる柳誌をもれなく読破し、しかも記憶力が至って旺盛な川柳作家がある

とします。
この作家がある大会で選者に選ばれ、選をしたのですが、手渡しされた山のような句箋の中から、この句はA誌にあった句、この句はB誌に載っていた句、この句はC句会で自分が扱ったことのある句、この句は二年前のD大会で天に抜けた句、この句はとも良い句だがE誌の句集に飾られていた句、この句は余りにも平凡、この句は説明句、この句は狂句、これとこの句は全く川柳になっていないと云った具合に、次から次へ句を落して行ったところ、なんと驚くではありませんか、手許に残ったのは自分の軸吟ただ一句だったのです。

★

さてここで問題になりますのは、果してこの選者は、選者として自分に与えられた責任と使命を、これで完全に果し得たのかどうかと云うことであります。

無論私自身は、これが本当の「選」だと思ふのですが、一般の投句者や句会の主催者達が、この結果に対して、本当に心から満足し、「これ正に名選なり」と、万雷の拍手をその選者に送るであらうか、どうもこう云った点について、私には割り切れないものがあるのです。

と同時に、どこの川柳大会においても、いまだ少し選者たるものが、純文学的な立場に立ち、もっと真剣に、もっと厳正にもっと良心的に、八百長気分やはったりを全然排除して選に望んだならば、各選者による入選句も、各五十句、六十句と云うような数にもならなければ、あの大会で、あの句会で、あの柳誌句報などで、どうも、見たり聞いたりしたようなことのある句が繰返えし繰返えし入選句として姿を現わし、発表されるようなことはなくなってしまうのではないのでしょうか。

★

こう云う私の考え方見方にどこか無理な点があるのでしょうか。
それともまた、例えそれらの句が過去において、いつの日か誰れかの手によって作句され発表されていようとも、もしその句に川柳としての価値があれば遠慮なくどんどん抜いたら良いではないかと

云うのなら、自ずと話は別問題になって参ります。

もしそれでも良いと云うことになれば、川柳大会が一種の催しもの、遊びの場としてならそれで会の目的を完全に果すことにもなりましようが、多少なりとも大会を通じて川柳の発展を計りたいとでも思うならば、これでは木に魚を求めることになって、ただ句が或る句会から或る句会に移動し、昔の句が今出て来たと云うただそれだけのことに終って、とうてい真面目な川柳作家の望むところではないでしょう。

酒 清



灘・魚崎

大塚合名会社 釀

また、たまたま或る選者がある句会で天地人に抜いた句は、実は先月のF句会で、その地の句は天の句として入選しており、他の天、人の句は普通句の中に入選し

ており、しかも遠地から参会したその選者の外は、殆どその事実を知っていたと云ったような場合、選者は自分はそのことを全く知らなかったのだからと云って、あくまでそれらの句を、天地人の句として押し切ってしまうものかどうか。

恐らくこうした場合、選者は自己の不明を詫びて潔くその三句を没句としてしまい、残句について新たに句の序列をつけ披露をするでしょうが、果してそれで良いのかどうか。

或はまた、G句は勉強家のH選者にとってはいつも見馴れている句で没句であるが、不勉強家のK選者にとっては、G句はいままで見たこともないような魅力あるぞん新な句で、特賞の句として激賞するなどの事態も事実起きて来て、だんだん選と云うものの意義と価値が、時に課題吟における場合判らなくなってしまう。

★

次に恋と云う課題について考えてみますと、川柳と云うものが生れてこのかた、一体幾百万の恋の句が川柳家と称せらるる人々によって詠み出されて来たことであらう。

しかもそれらの句の中から、各時代の各級選者によって、一体幾

川柳作家が創作吟の選をすることは極くまれで、普通課題吟の選に専ら当っております。

実は私もその中の一人なのですが、最近この課題吟の選と云うことについて色々疑問が起き、その解決がつかず困っております。そこでこの道の先輩諸士に、こ

十萬句が入選句として柳詒に、句報に作品発表されて来ていることでしょう。

こう考えて参りますと、いま私がか「恋」と云う課題について苦吟し、あなたがたが苦作されているその一句一句は、どうもそれと同じ句がその幾十萬句の入選句の中にあるような気がしてならないのですが、こう考えることは私の独断であり邪推であって、事實は決してそんなものではないのではありませんか。

★
そこで、少し論が飛躍しすぎるかも知れませんが、私はもうこの辺で課題吟は川柳界からそろそろ姿を消してもいい時分ではないかと思うのです。

そしてそれが川柳本来の姿なのではないでしょうか。
なぜなら前述のように、あちらの句をこちらに、こちらの句をあちらに移し、人の作った句と同じ句を幾人も幾人もの人が、ただ時と所を変えて繰返し繰返えし作って楽しんでいたので、これはもう子供の遊びごとであって、大人が生命までかけてやることにしては余りにもおそろま過ぎるのではないのでしょうか。

また川柳人の持っている川柳エネルギの大半を、この見戯にも

等しい課題吟のために惜し気もなく消費していたので、もうこれ以上の川柳の発展を望むことは出来ないのでしょうか。

★
従って、出来ては消え出来てははかなく消え去ってゆくあぶくのような川柳ばかり作っていないで、大衆の耳目を集め、興味を呼び起こし庶民の心からの共感を獲得し、しかも世人の明日の働きの心の糧として川柳が存在しその使命を充分に果たすためには、どうしても、川柳人のもつ川柳エネルギの全てのものを、所謂創作吟一本にしほって、これに惜しみなく投入し、命ある句を、魂ある句を、甘くやさしく囁きかける句を、奥があり味がありコトのある句をどんどんどんどん創作して、

★
名吟佳吟の価値を常に世人に問いつづけて行かなくてはならないのではないのでしょうか。
そうあることによつて初めて私達は、いわゆる「川柳の黄金時代」をこの世に現出し得るのではないのでしょうか。

★
さて論をもとに戻して、実は投句者自身も課題吟については、遊び半分、面白半分、面白味本位で作句し投句しているのであるから選もその積りでと云うのなら、話も判り選者としても非常

に気が楽なのですが、どうも事實はそのようではないようです。

★
投句者自身は、いま投句するこの一句こそは、この自分の手によつて初めてこの世に生を受け、しかもその句のもつ魂には自分の愛情の全てがかかけられているのだと、心の底から信じ切り、大きな自負と誇りと期待をもって望んでいられるのですから、いわば生命がけなのですから、なんじようおろそかな選で辛抱し許して下さいましょう。

★
噂によれば、或る作家の如きは、こうした選の盲点を完全にきいて、柳詒や句報をどんどん取り寄せ、雨の題が出れば雨、雪の題が出れば雪の句を、それぞれの必要に應じて、それらの柳詒句報の中から撰り出し、雨の雪の最上級の句をすつかりそのまゝ自分の句としてあちこちの句会に投句し、しかも勞せずして好成績をおさめ、山のように賞品や賞状を手にし、結構日当を稼いでいると云うことですが、どうも私には、本当にこのようなことがあり得ることだと思えてなりません。

★
あれこれ考え合せて参りますと、どうも課題吟には暗い面ばかりが多くて得るところもなく、しかも選者を常に悩まし苦しいためつけるなにかこう宿命的な陥穽と迷路をもっているような気がしてなりません。

★
従って一日も早く、課題吟が川柳界から消滅し去って行くことを、私は希望せずにはいられます。

★
それなのになぜこの愚にもつかない課題吟が、なんの抵抗もなく、なんのそりも受けずあたかも当然であるかの如く、多くの川柳家によつて支持され受け入れられているのでしょうか。

★
思えばこの愚行の繰返えしが、或は他の文学には見られない川柳の低級さと低劣さを表示しているのかも知れません。

★
なにはともあれ、親愛なる諸先輩よ、迷えるこの小羊は、課題吟の選に當つて、その入選句と没句のけじめ、即ち一線をば、如何なる条件のもとに、如何なる理由とこんきよによつて、如何なる点に確心をもつて引けば良いのか、それに対する明快な御回答を心から待ち望んでおるのでございませう。

★
乞う御教授を。
一九六〇、四、二〇記

疲労・二日酔・体力減退に

■適応症…肝臓疾患の予防と治療・疲労回復・二日酔・食欲不振・つわり・肌あれ・ニキビ・動脈硬化の予防・脚気・虚弱体質・糖尿病・食中毒・湿疹など

強肝・解毒新ビタミン

チオクタン

藤沢薬品 ■ 大阪道修町



疲労・二日酔
体力減退に
チオクタン



伊勢・相模・讃岐

富士野鞍馬

百人一首中に、伊勢、相模、讃岐と国名を称えている女性
が三人ある。

なには瀉みじかき声の

ふしの間も

逢はでこのよを

過ぐしてよとや

は伊勢で、藤原継蔭の娘、父
が伊勢守であったから伊勢と
呼ばれた。

はじめ、藤原基経の娘、宇
多帝の女御温子に仕えたが、
温子の兄仲平と恋仲となり、
それがやぶれて、しばらく太
和の父のもとへ帰っていた。

その後再び出仕して、宇多天
皇の愛をうけ、行明親王を生
んだ。その頃は「伊勢御息所」
とか「伊勢御」とかの敬称で呼

ばれていた。小町につづく歌
人、文学女性といわれている。

宇多帝が出家されて数年後

十才ほど年下の、宇多帝第四

皇子敦慶親王と恋愛がつづき

その間に生れたのが、これま

た有名な歌人中務である。そ

うして親王は四十才で薨ぜら

れ、伊勢は六十才位でなくな

ったと推定されている。

川柳に

いせはみちかく法性寺長すぎ

る (万安九)

伊勢は二音であるが、法性

寺入道前関白太政大臣は、な

るほど長い。

はま萩と伊勢よみそな所也

(タル三七)

浜萩を詠みそな伊勢声を詠

る。

浜萩を詠みそな伊勢声を詠

み (〃 六〇)

浜萩を他国の名にていせはよ

み (〃 二六)

「難波の声は伊勢の浜萩」

というから、伊勢なら「浜萩」

と詠みそなものという洒

落。

あはで此世を過してししゃほ

ん売 (タル一二三)

これは歌の文句にもじつ

て、シャボン玉売を詠んでい

る。

相模の歌は

恨みわびほさぬ袖だに

あるものを

こひに朽ちなむ

名こそ惜しけれ

というのである。

相模は、源頼光の娘だとも

伝えられている。本名を乙侍

従といったが、後に相模守大

江公資の妻となったので相模

とよばれた。

一品宮脩子内親王の女房と

して仕えたこともある。夫の

公資も歌人であったが、相模

の方が歌はすぐれていた、と

いうようなところから、二十

七、八才のころわかれた。

相模には、情熱的な恋愛歌

が多く、また多くの男性との

交渉があったようである。

源三位頼政の娘で、若くし

て二条院に女房として仕え讃

岐といった。右の歌をよんで

から有名になり「おきの石の

讃岐」とも呼ばれたのであ

る。後には後鳥羽院の中宮宣

秋門院にも仕えたらしく、正

確な生没年時はわからない。

頼政の死んだ治承四年(一一

一七九)には中年であったと

推定でき、建保四年(一一二

六)の百番歌会に出詠してい

るから、相当長命であったと

想像できる。

川柳はこの歌の文句をとっ

て、

人こそ知らね頼政が娘なり

(タル二六)

人こそ知らねかわく間も嫁は

なし (〃 四七)

新しいうち女房は沖の石

(末三)

等の末番もあり、

二条のきんたぬきと下女はお

ほえてる (タル一四〇)

と歌カルタの戯作もある。

外に、祐子内親王家紀伊があ

るが、紀伊に関する古川柳は

見当らない。

と、これも恋歌である。「千

載集」恋の部に「石に寄する

恋を言へる心を」と詞書して

のせられている。



「川柳雑誌」の標語

不二田一三夫

標語の研究誌「標語愛好会」の主幹で、毎日新聞にいた古い友だが、

「君」とこの雑誌の標語を作らせてほしい」と申し込んできた。わが社には、不朽洞会員杉本辰一作

入門も奥義も「川柳雑誌」から

というスゴイ句があるから、ちょっと手が出せないのではないかと、思ったが、先生にご相談申し上げると、

「せっかくなのご好意だから、お受けしたらどうか」とのご快諾を得たのである。

入門も奥義も「川柳雑誌」からこれは、路郎先生撰定の句である。標語人が先生に選をねがったことは、今なお感激していることである。

今回の先生にお願いしたかったが、ちょうど先生のご多忙期間中だったのでほかを選することになった。とにかく今すぐここで選をしてくれというのである。三日後には発送するスピード誌とあつてはムリもないことであつた。

金泥集

麻生 苜乃 選

写真班軽業めいた写しよう	阿茶	いざシャッターやつぱり固い顔になり	一栄	撮られ損ポーズ仕損のピントぼけ	悦子
モデル代貰わにやならぬほど撮られ	同	新米のカメラへ袴をかき合せ	同	ワン公も共に撮られて入選し	同
ベッドシーンの撮影終りホッとする	同	撮影所スターの苦勞も見つ	同	撮影も疲れを見せた八合目	同
撮影の子役シッコがしとうなり	同	型どおり記念撮影並ばされ	同	スタジオの春いっばいに造花咲く	花代子
写ってる積り廻すの又忘れ	都詩子	撮影所四季を問わぬ雪景色	同	撮影の前何でもがおかしなり	美代子
桜撮る筈へ途切れぬ人の波	同	記念撮影三十年の友は老い	万女	木登りをして撮影も御成道	知恵
花吹雪さて三脚の据えどころ	同	二人だけで撮りたいのに這入る	同	メガホンで撮影野次を追いちらし	周甫
パパのカメラ大きい扉を借り	若菜	ポーズもう板についてる天皇一家	美喜	本誌特写パリーキョにあこがれる	奈良子
あつという間の八ミリのわたし	同	撮影現場撮しニュースマンらしく	同	父ちゃんの撮影ママも猫も来る	たつよ
八ミリへあやめの橋を歩かされ	きさ子	撮影に足は危険な岩をふみ	小菊		
スナップ写真私にこんな顔もあり	同	撮影に我が世の春という顔で	同		

次回題「順番」〆切六月末日

ほくが本社側から選をし、標語愛好会の主幹がまた別に会選、投句者全部が更に互選をする。実に一課題三者選ということになるのである。同一句を三者が第一位に推すということは、まああり得ないことだが、真に万人共感の句なら奇跡ではない。

だいたい標語の選はズブしろ、とがして、作者はその道のベテランということになっている。たとえば社会的には著名人だが標語なんて作ったこともない人や、募集元は人気とりに多額の賞金を出

し、商品宣伝を目的にするだけで過去の当選句なんてご存知なく、盗作であろうと焼直しであろうとドンドン入選させていくのである。そこを賞金だけが目的の作品ドロボウが、なんの苦もなくこれらしろうと選者を手玉にとるのである。

東京のある有名な川柳の指導者が、昨年だったか、ある商品の宣伝標語の選をしたが入選句のほとんどが盗作だった。十年、二十年前の当選句がわらうはずがないのだから、川柳の諸大家だけは、標語の選を依頼されてもことわってほしい。標語人にも三十年、四十年というベテランが相当多くいることを頭に入れてほしいのである。今は川柳陣の端くれを汚がしているだけに川柳界からこんな人が出ると、まったく肩身のせまい

思いがするのである。さて、ここに集った句は、あまり香ばしいものはないが、入選の安田たけし氏は、俳誌「六甲山」の編集者だったし、選外の梅木宗一氏は不朽洞会員であり、生田太郎氏は戦時中のあの有名な「出征兵士を送る歌」の作者でもありいずれも文筆人であったことはさすがだと思つたことである。

入選

世をうがつ名句の花園

「川柳雑誌」(北島博邦)

「川柳雑誌」は心の扉 (安田たけし)

選外

川柳の本流 (沖田裕彦)

柳壇への指導標 (梅木宗一)

作家への登竜門 (梅木宗一)

天分の蓄ひらかすよい柳誌 (村山徳正)

(佐々木武志) 正しい「川柳」導く「雑誌」 (沖田裕彦)

「川柳」は世相の鏡 句の道場 (林田よし子)

学ぶ手ほどき決め手に「川柳」 (福西良一)

親も子も「川柳雑誌」の愛読者 (隆 誠)

柳壇への門 奥義への道 (原 新一浪)

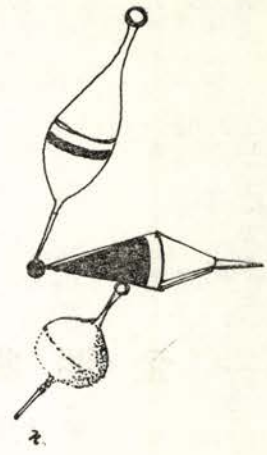
詠む人情「川柳雑誌」に 湧く詩情 (泉 竜一)

柳壇へ生気吹き込む 「川柳雑誌」(生田太郎)

鑑賞も受賞も「川柳雑誌」から (山岸昭一)

「川柳」へ初歩も大家も勢揃い (小松不二雄)

開く「川柳」文化のとびら (村山徳正)



路

集

告白

清水白柳選

娘の告白両親を慌てさせ 庸佑
母にだけ身の不仕末を打明ける 一鶴
告白をして十代の悪るびれず 永香
告白の決心をしてよく眠り 蜻蛉
末ッ娘の告白に父折れて出る 市郎
告白を聞いてりや保険の話になった 夢虹
同情で釣る告白と客知らず 万女
眼鏡をぬぐうて告白の覚悟出来 周甫
告白をしてあつげなく捨てられる 晃康
興奮の告白はては涙ぐみ たけお
告白の機会ないまま古稀となり 雄々
美しい告白迫る死期を知り 井蛙
告白をすれば離縁になる 養子 定月
告白をしてから遂に行きそびれ 保夫
告白の電話の傍をたしかめる 初甫
告白は意外なことにふれてくる 圭井堂

告白をしてから晴れた日が続き 忠太朗
告白をする気になって日記練る 十九平
告白を日記にとめて気をやすめ 裕邦
嫌いよとガムをかんでた儘で言い 忠三
両親に出来ぬ告白叔母にする 藤波
人様の告白金で買う雑誌 兼治郎
女流作家過去を告白して儲け 繁太郎
告白の瞳は裏切った瞳に見えず 祥月
告白をせいでわかる瞳の色よ 代仕男
告白をすればやつぱり腹を立て 弘道
好きとでも言え相手には負けたよう 卯之助
告白をしてから飯に味が出来 古心
大昔からの言葉で告白し えく呆
モラルとは縁ない顔で告白し 生薑
告白がポチポチ惚気になつてくる 雄声
しみじみと告白めいた過去にふれ 花美
告白へ年甲斐もなく赤くなり 雪峰
告白になかった事も記事になり 宗太郎
あつさり告白をして疑われ 旭峯
自問自答告白をする と決め 白葩

情熱がさめ告白の他人めき 葵丘
告白を軽くうなづく医者も役 南牛史
告白をテレビの型でやってみる 静観堂
同窓会今は楽しく告白し 鎮海
告白をポストに入れる手が振い 昭
正直に告白した子叱られる 愛鳩
告白を期待ベンチの沈黙よ 孝風
告白のチャンスに風にもつてかれ 雪峰
告白をするハンカチを小さく折り 涼人
ごたごたを洗いざらいにぶちまける 八九寸
あいごらと告白を聞いている腹の内 紡毛
雨もよし愛の告白つづく道 初甫
告白の窓扉空が澄んで居た 魁光
告白を前に灰皿引きよせる 夜潮
告白に課長の頭文字も入れ 淀月
告白の言葉を女まだ覚え 妖人
飲み過ぎの告白をして社を休み 南牛史
わが身へも聞かす告白とぎれがら 惠二朗
打ち明けてくれたが力にはなはず 実男

告白もせず雑談に時が経ち 美音子
正直をほめられ僕がやりました 藤波
告白をして青空の広さ知る 惠二朗
告白へライターカチカチ鳴つただけ 敏子
告白をうなじに受けて固うなり 九紫
告白を腕組んだまま聞いており 庸佑
画にみとれ愛の告白聞きもらし 山椒坊

浮気

西いわを選

告白をする気の呼吸整える 涼人
浮気しておいでと妻が送り出し 代仕男
人妻に浮気心も春の宵 蛙木
本当の恋を浮気にみくびられ 雪峰
浮気していても女房を可愛がり 愛鳩
桜花浮気を誘うように咲き 雄声
浮気しても妻への土産ちゃんと買ひ 忠三
黙礼で浮気同士がすれちがひ 宗太郎
敏感な妻は浮気を嗅ぎわかる 徹也
倦怠期浮気をしたい気にもなり たくを
うつり香で結構たのしんでいる 伊津志
鉢巻を締めて浮気出来もせず 豊年
冒険と知りつつママムの瞳に吸われ 静観堂
浮気した事を近所が嗅ぎ付ける 南牛史
浮気から始まった恋が燃えはじめ 花美
妾宅に浮気するなと抓られる 山椒坊
浮気でもなからう 壽寿を妓に酌がせ 東天紅
浮気はこうするものと抱きつかれ 一鶴
浮気した婦り言訳考える 孝風
多情仏心世間は浮気として詰り 十九平
三面をにぎわし浮気死んで行き 圭水
金のない浮気はたかが知れており 惠二朗
山にむいて浮気わびしい湯のタオル 紡毛
ふと浮気心へ病んでる妻の顔 八九寸
浮気して自分の魅力たしかめる 吸江
浮気する心起こさず春の風 同

農家

岡田夜潮選

二人共アリーブイのある浮気 一杯の酒が浮気へ踏み切らせ 浮気するつもり柳に風があり 目的は金と知って いる浮気 子が出来て夫の浮気遠く見る 妻勝負浮気の際をあたえない 又病氣出ましたんやと云う浮気 養老院に来て浮気が捨てられず 独身という事にしてする浮気 幾らでも聞きたいよその浮気なら 女房に死なれ浮気ピタリ止め 浮気するつもりの人と式を挙げ 淡々と浮気にふれず飯をつぎ 妻はもう怒らず浮気噓って居 気づかれたらしいと話して居る 浮気したアリーブイ日記にあはれる かつそりと浮気が戻る裏の道 浮気する時間は別にとつて置き

住

死んでから浮気心でない知り 死ななれど浮気はまだ続け 恐妻で通しこつそり浮気する 浮気する夫へ負けぬ程浮気 純情が一夜の浮気にしておかず

人

浮気した朝を茶漬けの走り食い 腹の子が浮気を喰いものにさせ

地

かりそめの浮気に女命まで

トクター唸る農家に野良うらら 非農家が昼寝している農繁期 農家なら嫁かぬと農家の娘がきらい 百姓はさせぬ約束忘れかけ 百姓のきらいな方があとを継ぎ 端境期をひろげて干す農家 太陽に農家はストもして居れず 基地となり田畑だんだん狭うなり まだ買われぬテレビ農夫は一徹に 子宝を労働力にする農家 里帰りの農家の汗を背負うてき 嗣代祈替えをする小百姓 秀才と言われ農家の後継が 農家への縁談笑う赤い爪 青年の意気篤農家をめざし 長男の理想晴耕雨読なり 知っている農家へよってトクニツ 商魂の捌け場白羽を先ず農家 農家まで行かず車は待たされる 農地法元の小作は蔵を建て ドラが鳴り二男としての移住なり 要りもせぬ道具ごとくする農家 農業に優る八歩を敬遠し 甚六は止むを得ないと鐵を取り 間借りしても農家を嫌う 義理堅い母は農家の育ちなり 憧れの都会で墜ちた農家の娘 長男の田を棄てさせた都会の灯 菓丹きの意地が一軒町はずれ 潮底に沈む農家の壁を塗り 猪が農家の経済かき乱し

市郎 秋月 弘道 万女 白葩 周甫 庸佑 紡毛 雄々 井蛙 定月 藤波 兼治郎 保夫 圭井堂 蜻蛉 繁太郎 魁光 徹也 敏子 裕邦 忠三 宗太郎 勿之助 妖人 どんたく 和三郎 不村 豊年

停年を知らぬ農家の幸を知り 小作農夫唱婦隨のままに生き 貧農にせめて空気が澄んでいる 篤農家牛も家族の中に入れ 檀家みな農家和尚も山羊飼い 板の間へ農家法事の畳敷く 八九寸 はなやかなロケット手を貸す農家の子 鎌だこのどの子もベンダこほり出来 王城のような農家の屋根が見え 人情もからみ農家は買わされる 流感のように農家の洗濯機 旅の窓農家の軒の新見る 鶏が畳を歩く農繁期 コロリーのガラスが貼つてある農家 塩加減農家としての味を付け 討死を思わず農家の昼寝かな 地 是ねつるべ田舎の音できしん 子の寝顔のぞいて草刈籠を負い 軸 サラリーマンまんざら非農家でもなし

天

軸

川柳雑誌社特製

投句用 柳箋

一冊(五〇枚綴)三〇円 送料(一冊分)八円

市郎 秋月 弘道 万女 白葩 周甫 庸佑 紡毛 雄々 井蛙 定月 藤波 兼治郎 保夫 圭井堂 蜻蛉 繁太郎 魁光 徹也 敏子 裕邦 忠三 宗太郎 勿之助 妖人 どんたく 和三郎 不村 豊年

伍健氏の年令について

麻生路郎

★本誌の四月号で長野文庫氏が、二月十一日に亡くなられた前田伍健氏の「正しい年令」を発表されていたが、そのことについて私の意見を多少く述べて見た。

★文庫氏が説かれるところによると、戦後県下柳人の経歴調査をした時、先生にお尋ねしたところ、明治二十六年一月五日生れたと云われた。従って愛媛年鑑には二十六年となっている。ところが亡くなられた翌日、先生の宅で、記者

訪問をうけ、先生の生年月日を調べたところ、明治二十二年生れと判明した。親戚の方々さえ六十七才だと信じて居られた方が多かったので、早く帰った取材記者は六十七才と新聞に発表されたが、実際は七十一才一カ月なのである。年令を偽ることは女性には多いが、男性にも無いことはないから、大してとりあげ程のことではないかも知れぬ云々。

★昭和二年に「川柳雑誌」へ発表された生年月日と、三十余年後、死の直前までの生年月日とが、共に偽りの生年月日であることが、事実の前には何等かの原因がなくてはならぬ。それを私は知りたいのである。文庫氏の云われるように

女でも男でもフトしたことたまにたま年令を偽ることはあつても、三十余年間を通じて一貫したウツをつくという事は常識的にも、又心理的にも考えられぬことである。そこに余人に語り得ない原因が青少年時代にあつたのではないかと思う。

★私は以上の疑問によつて氏の人格を傷げようとは思わない。私の知る限り、氏は謙譲の人であり、平和主義の人であり、友情の厚い人であり、世話好きの人であり、叡知のはたらく人である。しかも真の生年月日とその死に直面するまで何人にも漏らさなかつたというのは何に原因するのであろうか。

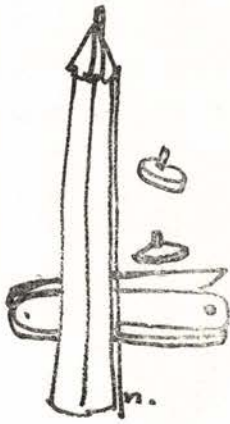
★試みに「川柳雑誌」の「川柳家

親和クラブで開催。▼大阪通信病院川柳会は五月二十八日(土)午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川柳備前支部(岡山県)五月句会は十五日和氣町草二居で開催。▼岡山電報局ゆめ五月句会は七日法院居で開催。

★今後、後輩が伍健研究をする場合、すくなくともこの問題に必ずぶつつかるであろう。この問題を解明するためには、近親の青少年時代の友人などの在世されるであろう方の現在でなければ調査が不可能となるに違いない。私のせむたいのは、氏に私淑されている人達で、今からすぐに伍健研究を始めていただきたい。氏の幼年時代青少年時代の環境を充分知り得たら、氏の多年の作品がどうして生れたかを究明することが出来るであらう。そうすることによつて、氏が生年月日を偽つた心算をうかがい知ることが出来るかも知れないと思う。

★ムヤミな村度は出来ないが、おそらく氏の前半生には他人に漏らし得ない苦労がひそんでいたのではなからうか。その暗い前半生が氏をあれだけの田満な、謙譲な人格者としたのではなからうか。

柳界展望



句会

▼本社六月句会は七日(火)午後六時から難波高島屋西横バス停前未生会館(四階広間)で開催、タミナルに近く足湯の良い会場なので、多数の御出席をお願いす

阪市)は五月二十四日午後八時から南区三休橋南詰中島生々庵居で開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は五月二十日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は五月二十六日(木)午後六時から難波の

▼川柳岡山県各支部連合春季吟行大会は四月十七日小森温泉ホテルで開催、三十四名の出席者を得て極めて盛会であった。▼第八回蟹の目川柳社大会は六月十九日(日)正午から金沢市下小川町支門寺幼稚園で開催。兼題、勝負・お早う・良心・団地・孔雀・底・浮草各題三句以内、投句は八四切手三枚

封入の上六月十五日までに金沢市片原町三六蟹の目川柳社宛。▼噴煙十周年記念自選句集「草千里」作品が募集されている。作品自選十句(旧作新作を問わず)住所氏名職業生年月日を明記、参加費二百円封入の上、七月十日迄に熊本局私書箱四五号句集「草千里」刊行委員会宛。九月中旬刊行予定。

光ホテルで多数の名士が参列、狂言、踊りなど盛り沢山なプログラムの下に開催された。本社からは路郎主幹が健康を害されているので腹乃女史が代理でお祝い申し上げた。▼須崎豆秋氏(大阪市)は昨年より半年目に宿病の胃瘵で悩んでいたが、幸に小康を得ていますので川柳まつり当日には鎮痛剤と健康保険証を持って必ず出席しますと。▼足立春雄医博(大阪通信病院産婦人科医長・不朽洞維持会員)は学会出席と視察のため六月一日二十一分羽田発の日航機で欧米への旅に出発された。▼速水真珠洞氏(福岡市)は

消息

五月二日付西日本新聞紙上で新天町商店街協同組合理事長森友助氏と「どんたくを楽しく」と題して対談された。▼築山快夢起氏（ハワイ）は四月二十三日のハワイ支部句会が、ウイロー社の生みの親、古川風竹氏の十三回忌に当るので風竹忌を催し、出席者一同追悼句を持寄り、懐旧談に花を咲かせて故人の遺風を想はれた。

▼幸田一哲医博（大阪市）は五月二十二日に夫人、令息を同伴、新鴻で開かれた学会へ出席、役員に当選された由。▼水谷竹荘氏（大阪市）は四月三十日から三日まで下呂温泉から蒲郡、知多半島一周の旅に出掛けられ、西浦温泉銀波荘から「満員の宿へ割込む連休日」の句を寄せられた。▼戸田古方氏（豊中市）は五月二十日から二十七日まで大阪市立美術館で開催された第二十六回東光展の四室へ「生徒たち」を出品された。

▼木下一休氏（和歌山県）は単調な療養生活の中で、毎月届けられる「川柳雑誌」に大きく力づけられていられると。▼若本多久志氏（西宮市）は四月二十一日、四月になって二度目の上京をされた。朝八時半に伊丹空港を発ち、羽田十時半着、用件を済ませ終便の九時半に東京空港を発つというあわただしさであったと。「日帰りで東海道を空の旅」▼高田抱逸氏（大牟田市）から三池のストは数少ない新組合が苦戦をしていま

すが、市民の大部分は新組合を応援しております。大牟田の昨今は混沌とした有様でわれわれ中小企業の商人、請負業者が大迷惑をしていますと。▼山田季費氏（広島県）は五月十一日出雲自動車営業所へ出張、翌日三瓶山へ登り志学温泉に遊ばれ、「出張のついで大社へ足のはず」の句信を寄せられた。▼福田丁路氏（高槻市）は五

年勤めたラジオ・テレビ部長から社会部長に栄転された。「特ダネへ記者水を得た魚となる」▼尾崎方正医博（大阪通信病院耳鼻科医）は五月十七日リウマチスのため、堂島大橋北詰大阪厚生年金病院四階三二号室へ入院された。一日も早い御快癒をお祈り申し上げます。▼岡田夜潮氏（岡山県）は目下岡山市大



若本多久志氏（西宮市）はライオンズクラブの集いで広島から近影と句を寄せられた

原爆記念碑前にて (広島市)

平和への祈りも十七文字に寄せ

月三日箱根から宮の下温泉に遊ばれ「湖に影を写して富士は映え」の句信を寄せられた。▼林野甞光氏（呉市）は五月五日出雲の玉造温泉に遊ばれ、激務の疲れを癒された。「海猫へ生酔あいさつして帰る」▼工藤甲吉氏（青森市）は東奥日報社の四月の異動で、満五

院へ入院治療中とのこと、病名は書いてないが多少長びくのではないかと案じている。

慶 弔

▼菊沢小松園氏（大阪市）長女道代さんは四月二十七日三並辰男氏と塚宮原神社で華燭の典を挙げられた。お祝い申し上げます。▼清水

白柳氏（大阪市）令嬢のぶ子さん は五月十一日午後一時四十八分、再生不良性貧血のため自宅で死去。十二日午後二時から自宅で告別式が執行され不朽洞会員の多数が参列した。十二才。謹悼。▼岩垣日本村氏（大和高田市）の母堂は老衰のため死去。八十七才。謹悼。▼尼緑之助氏（出雲市）の敵父は五月一日老衰のため死去、九十二才。謹悼。▼弘津柳慶氏（柳井市）の岳父は五月十二日死去。謹悼。▼長谷川美代さん（加賀市）の母堂は四月十二日に、療養中の令兄は四月二十二日に死去された。謹んでお悼み申し上げます。

転 居

▼奥津啓一朗氏（東京都）は五月十五日左記へ転居された。東京都目黒区芳窪町四一 ▼室井八九寸氏（京都市）は京都市北区紫野連台野町九小中方向へ転居。

番地変更

▼小島さぎす氏（大阪市）の住所の番地が変更になった。大阪市東淀川区西中島町二丁目六六番地。

▼川端柳風氏（東京都）住所の番地が左記の通り変更になった。東京都渋谷区本町六丁目八番地

川柳まつり実行委員会 四月二十七日 午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院階上で本年の川柳まつりを特に盛大に行うため実行委員の打合せが開催された。出

席者、生々庵、いわを、古方、水客、潮花、いさむ、女等の諸氏

★ 新会員紹介

五月▼建沼康之介（高知県）正会員 一竹荘氏推薦

六月▼今西生薑（大阪市）正会員 一三夫氏推薦

正 誤

▼四月号四十頁下段五行目の句喜じろう、とあるは千尋の誤りに付訂正。▼前号十一頁二段九行目目二三度とあるは日に三度の誤りに付訂正。▼三月号二十四頁下段の最後の句、兵庫県齋藤寺武次氏の句に付訂正。

★ 古川麗花麗氏（オランダより）

前略 私の洋蘭も大分熱が上りまして「orchard crazy」（果樹園気狂い）になりかけておると友人から云われます。この間、カラー写真を撮りましたが、色がよく出て二十四尺のグリーンハウスを作りようやく三百鉢位集めました。例の通り私が作り役、ワイフは花を切り役、私の方が大分損のようです。これも女尊男卑の国のせいですが。呵々。路郎先生の御体の調子はどうですか。御旅行も出来るようになったので、御旅行も出来ております。もう少し先生に生きて貰わないと困ります。そしてハワイまで足をのばして貰うようになればと皆で語り合っております。では近況御通知芳々御礼やら御詫やら申し上げます。 不

会から

区三休橋南詰中島小児科診療院階上で本年の川柳まつりを特に盛大に行うため実行委員の打合せが開催された。出

（五月十一日）

いのちある句を創れ

各地柳壇

投稿規定

▼用紙は原簿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

各地柳壇を見ていると各支部の動きが
手にとるようだ。支部句会の幹事さんの
ご努力が目にしみる。
(編集部)

川 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂報

塗りたてのペンキでこぼこ目立ち 三舟
でこぼこの道もなつかし郷里に来て 涼秀
年毎にでこぼこ目立つ同窓会 和楽
でこぼこのある人生へ呱呱の声 水堂
白髪二三本でこぼこの世をまきまめる 清生
血圧の高さにワシマン逆らえず さぎす
血圧が上りますわと妻なだめ 三十郎
血圧を案じて叱られ上手なり 葉光
血圧が話題になった通夜の席 東洋男
絵はがきに見る程こも眺めよし 永香
絵はがきの文字もかわい初便り す、む
恋人によい絵はがきさよって出し 敏明
絵はがきを見せ合ひ夢を追うベツト 一鶴
絵はがきで余裕たっぷり旅便り 礼司
修学旅行絵はがきがあとで着き 灯子
絵はがきは宿の窓から見える島 旅風
絵はがきも色あせている山の寺 薫風子
絵はがきのおもかげ痛し尼法師 若菜
絵はがきの通りと友の旅だより 花村
絵はがきの湯けむり確黄の匂いする 香林

川 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

泥んこの中ですやすや酔いだおれ 晃
背に泥をはねてせつちやて来る 文秋
家紋しかとききみつけてる大瓦 奈良子
瓦にも雪国という色と型 庸佑
マノービル夢にえがいた家一つ 十悟
マノービル妻もろの気になって来る 清人
早駕籠が赤穂へ告げる片手落 唯義
実力が物を言うてる片手落 す、む
好き嫌い手伝うている片手落 喜仙
鼻葉うわさではない片手落 生薑
子の野球帽子でれこのエースが 山椒坊
舞師会でれこの足にカンが立ち 鎮海
人生はてれこ子や孫さきに死に 一三夫
陽と月とてれこに出たりはいつたり 豆秋

川 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

のりかえの所に一軒ある得意 一栄
乗り替えた安心感が又眠る 六童子
適任と言われて実は左遷され 守信
適任と推選しといてケチをつけ 柳宏子
新妻と行く行楽は人をさけ 正一
ゴミを焼く予算に弱る行楽地 白柳
行楽の孫に引かれる手の温み 清子
同僚のへま課長へはかくしとき 井平
新任は心得ていてへまをやり 清秋
同窓会もう忘れてるへまに触れ 文秋

川 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

生まれたてのひなにちよぼちよぼうぶ毛
が生えて来た 慎太郎
生ぶ毛そつたら父のまゆに似る 舟遊
策帳にひっかからない強い奴 竜昭

柳宏子

策帳のことという時ミスが出る 柳宏子
整然と社宅ポストへたそがれる 柳志
たそがれが一刻早いビル谷間 漣
モンタージュ出来て誘拐魔術 泰
誘拐へパンチ食わせてきた勝負 十悟
誘拐の子がおばちゃんを寝たどけ 生薑
誘拐をされたこ焼の味を知り 菁風
駅へ竹つ無分別へ怪しき瞳 六童子
誘拐のこの子が憎いわけでなし 保美
貧乏でけけたまなごをしよほっかせ 晃
貧乏を皆知っているベン仲間 満潮
貧乏に育った芯の強きなり 千尋
貧乏な長屋困んでビルが遠ち 花宵
貧乏はお互様の嫁をとり 葉平
人相のよさ貧乏にまけぬ顔 旅風
女乞食驟かれそいらたそがれる 梅志

川 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

二人を包み静かな春の雨 七面山
雨の日の母には雨の日の仕事 賤女
失恋のウナ冷たく打った雨 こんた
雨にでもなほ逢いに来ない人 東岸
花たより羽織のほしい妻という 久米雄
心中の記事と並んだ花だより 只世
不景気な面がのぞいた花だより 鮫虎狼
動けない父が先祖をよう祭り 萌芽
にせ物を先祖家宝として 伝え 一善
御先祖の墓の山だけ売り残り 麦太楼
読みにくい先祖の墓のあるはこり 飴ン坊
御先祖が偉くて困ることも出来 美沙
ひげ面の課長先祖を疑われ 浄美
御先祖の鼻にかけて左前 あやめ
御先祖のかたみ系図と九寸五分 半翁
恋人の顔ゆがませたにぎりすし 順湖

流風

湯披れを鼻緒のゆるい下駄にのせ 流風
雨蛙今日もなしている旅の朝 竜泉
どしや降りへ牛のたすなをまきまめる 正洲
新婚の日曜雨で寝たまんま 香春
丹前を着ても手形がこびりつき 草二
御先祖の地盤で固い票をよみ 平々
新婚へ温泉恥しい程に澄み 素身郎
湯の宿で大工造作を見て廻り 芳月
能書きの程でなかつた温泉の効きめ 麗水
あかぎれの手で老妻がにぎり寿し 秋月
言い訳の折りに詰り握りし 喜楽
悲話秘めてダム青く青く澄み 万女
丹前は皆んな伴せそうに見え 一声
丹前を着て全快の脳につき 美舟
ぜんそくが咳をしいしい煙草すい 水仙

川 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

出張へ社長代理の顔で立ち 伊久野
出張であの日のことがよみがえり 明良
出張の留守笑わぬ日が続き 柳風子
出張に救われている 倦怠期 万女
出張の疲れを妻にいたわれ 一声
前触れもなく寄附金を持ち込まれ 竜泉
再婚の前触れ後家が派手になり 輝次
前触れがあつて祭の客が着き 草二
前風が来る前触れの雲となり 基司
前触れもなく栄転をしてしまひ 久米雄
結婚の前触れ付き合ひ悪くなり 一正
畳替へ新妻のくるのがわかり 博
こんどこ出来るらうと母を呼び 幸仙
仰山の前触れ代理で用を足し 美音子
前触れの客へ障子の穴を張り あやめ
我慢して金をためては医者を呼び 健次
我慢した欠伸上司の目と出合い 真奇

我慢する事も教えて娘を嫁かせ 正州
 もうお揃いですよとシムから電話 三六
 お揃いで出て照れくさい人に会い 東岸
 三分の踊りにお揃い作らされ 芳月
 ギリギリはスミス時計を自慢にし 秋月

川 雑
 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

週末のゴルフ少々不満出る 銀水
 義理人情云えば不満は遠く居り 内海
 一生を不満で過す不倖 エス子
 物事がよく行きすぎて不満も出 緑星
 世の中は不満だらけの孤独の身 吟声
 婦らぬ子母の不満はつづくなり 周防
 仕事場の不満帰って家でまき 紅溪
 悪癖と気づかず不満又並べ 須磨子
 ブラカード顔には何の不満なし いつ生
 空腹で料理の不平グリがつき 旋風
 あの頃の不満は金で解決し 絃月
 天職に生きてなんらの不満なし 北海
 教会へ通い貧乏それで良し 紅茶
 時折の不満もおさえ共白髪 美山
 不覚にも女房不満洩したり 柳葉
 終止符を打つ日不満の消える時 浅太
 何もかも不満ばかりの倦怠期 泉水
 棺に蓋するまで不満続くなり 魔花麗
 晩酌が不満の棄て場とは悲し 風草
 上役の命なら腹の虫おさえ 快夢起
 君もかと性的不満ウマが合い 斧平
 小姑の不満は嫂綺麗すぎ 平八郎
 短気坊不満のおり場に石を蹴り

川 雑
 西宮支部句会 (西宮市)

菱田満秋報

なつかしき故国の畳踏む素足真砂

酒の色みつめる顔が生きており うしほ
 この道を毎日通って梅見つけ 修児
 花を見て戻れば暗い灯がともり 千尋
 大空の一点みつめる 精薄児 三舟
 安い方まだみつめてる市湯籠 球絵
 投げだした素足やっばり十五の娘 秦
 湯の香り素足に滝の音近し 蝶花
 振り切って白いうなぎを見詰めてい 杏花
 カナリヤの籠へ自由な雀来る 正祐
 空室を見に来て開けた戸がきしむ 一平
 自由意志という寄付金が断れず 半歩
 母連れた花見は群をはなれて見 舟遊
 女一人自由に暮せば小うるさく 花美
 素足の娘踊る芝生も春の色 猛彦
 糸だけの長さトンプボの自由なり 弦月
 自由主義明治の母に割り切れず 留三
 割勘をいらぬ顔で受取られ 牧人
 空室を女世帯がもてあまし 満秋
 爛番は散り込む花を手で払い 蘇堂
 割勘の一円おっぱはんはとつかず 静馬
 割勘の管やっつたのに礼云われ 一十
 みつめられてるのを知っている自信 すゝむ
 座りだこ無惨に見える素足なり 多久志

川 雑
 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

男ならやるんだがなと母老いず 葉満子
 男ならと女房亭主を引きまわし まさお
 男なら私を連れて逃げて欲し 喜染
 男なら期待がもてる通信簿 只世
 もし妻が男であればお殿様 天童
 男なら苦勞もせよと里の父 幸堂
 男ならこそ女房へ負けて勝ち こん太
 男なら泣くなと母の目に涙 七面山
 家風にも馴れて奥さん板につき 弘司

口のたつ奥さんいつも狩り出され 昭子
 おばさんと呼ばれて奥さんとなり 美沙
 奥さんは引立役に女中連れ 順湖
 行商が奥さんと呼ぶエチケット あつき
 奥さんの顔が浮いているコップ酒 賢也
 奥さんと奥さんと呼ぶ日の機嫌 竜児
 奥さん奥さんと押し売り盛り込み 南鉄
 奥さんと呼ばれ温泉の一夜妻 賤女
 せつかくの旅行の海が荒れつづけ すみ子
 旅先でお国なまりの盃を挙げ 義風
 妻君の愚痴へ旅行の熱が冷め たつよ
 旅行賃たまって妻の気が変わり 仙人坊
 旅行には出たが空巢が気になり 典膳
 待つ親の方が眠れぬ娘の旅行 房子
 弱虫へ恋の女がしがみつつき 山林坊
 恋人の胸にすがったとこで切れ 吐夢
 不器量がもてて恋人まだ出来ず なつめ
 恋人に逢った日素適な娘にかえり 登仙坊
 恋人を待つ間にちよつとコンパニ 幸子
 恋人に抱かれて春の夢が盛け 益子
 恋人へ若い命を派手に捨て 信治
 恋人が出来て妻子がこわくなり 久美子

川 雑
 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

こけしの眼に春眠のありやなし 幸男
 春眠のどこかに水のおちる音 紫蘭
 酔加減は姑にまかせ寿司が出来 つる子
 酔が浸る鮎の白さをよしとする 鳥雀
 女医の打つ注射へ男眼のやり場 和三郎
 婦長の注射は無痛ですみ 禎一
 今、心に帯る言葉を考えて 際
 丁度叱られさうな時間に帰って来 ゆきら
 女野心男野心とちもつがなく舞えり 司郎

川 雑
 鳥取支部句会 (鳥取市)

愛嬌のよい娘が先に嫁してゆき 単人
 腹の内仲よしだけにうちあける 秀和
 愛嬌に未練があつて虎になり 南山
 損をするように思うか愛嬌なし 八文鏡
 仲よしの影何処までも手をつなぎ 天邪鬼
 証言へ愛嬌忘れた顔で立ち 一机
 あま酒を吹き吹きする背が寒し 可志
 愛嬌はないがあつさりまけてくれ 三歩
 世界中同じ電波で手をつなぎ 若人
 たくまざる愛嬌店に人をよせ 耕民

川 雑
 木次支部句会 (鳥取県)

藤井明朗報

メロデーが四十路の胸を狂わせる 清夢
 運動が効いて異動の向きを替へ 明暗
 恋人が出来かけた頃異動する 晃男
 折詰がもう待ち遠しい予 供連 佳仙
 下馬評は見て来たような異動前 古坊

品質優良
先カペン
 TACHIKAWA PEN



タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社

花びらをはないて屋台裏を巻き 幸夫
花満開はるばると来て人に酔い 明朗
夜桜に残党だけが飲み直し 隆昭
散る花を受けて飲みはす花見酒 栄治
定年に去りゆく恩師の影細く 鶏声
餞別に頭の痛む大異動 千恵子

川維 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一路報

活け花に匂う幸福新世帯 明美
岐れ路幸福になれと背をたたき 正雪
幸福は雲と話せる心なる 舟遊
幸福は心の器だけにあり 義子
幸福へ女は声をつまらせる 留三
平凡が幸福と知った時遅く 東雲
幸福のあまり友人の義理を缺き 弦月
病院の患者も春に彩られ 勇月
病舎よしアカシヤの四季憶えり 京子
紙離も病院暮しの友となり 丹謡
入院の良き文鳥手にのせて 牧人
同病がいる病院が落着かせ 寿栄
病院と縁が切れない早産児 芙路
退院の荷造り窓を開けはなし 千尋
春霞ぼんやり山を包んでる 泰光
陽気が増すほど幹事気を使い 六光
快い陽気靴を磨かせる 球絵
女手で五人の男育て上げ 三舟
台風禍女手だけの朝が来る 一杯
女手であしらい兼ねる犬を飼い 山友
母の手で嫁にやる娘の美しい 策平

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

お通夜へ来て失礼な笑い声 翠月
失礼な無理な座席を尻で割り 青春

酒さげて昨日の失礼わびに行き 無閑
失礼はお互様の混んだ風呂 車桑齋
失礼を詫びる鈍子の数がふえ 蛙眠子
しやべるな口から泡が飛んで来る 節枝
失礼なライバルまたもつげ口し 新雪
失礼は承知の上の酒の無理 一保
世話好きが丸くおめたにちみ合い 幸子
敵くちやあつても好かれる札の束 素瓢
映画好き今日もなんとか言って行き 美喜江
恐妻家好きでもらった弱身あり 精耕
皇孫にあやかっただ子が女の子 鶴丸
失礼な姑と思う咳払い 雄々
曲り角までが二人のランデブー 一机
曲り角借金取りが待伏せし まさお
更年期女の曲り角悲し ユリ子

川維 広島支部句会 (広島市)

平田越舟報

雑音とて亭主聞かぬふり 秀月
代理でもまにあつて草野球 吐川
名曲も雑音なりに聴く明治 美文
セックスに近い小説賞を受け 二三夫
小説は不思議な場所であつた合い 昌幸
パチンコにすられ雑音意識する 上利
代理今日自分の書いた祝辞読み 越舟

川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

寒行の太鼓へ炬燵暖い 吸江
修行という真剣な眼に出合い 左久良
修行の身に惹かない盆と暮 東天紅
大臣にも苦が手の孫が一人おり かいこ
単位も最後の苦手だけ残り 圭井堂
苦が手に四桁で割れた掛けの 摩天郎
御出産の日に合わせると無理を言ひ 徹也
長男の利口が親の気に入らず 狂二

新人社修業のつもりお茶もくみ 好郎
寒行の弥陀を念ずる声も冷え 裕邦
御曹司修業さす気の他社つとめ 小石
産声をテブコーダー待ち構え 古方
くたびれて今日もあくびの電話帖 阪井
武者修業のつもり二日酔に耐え 生々庵

川維 名古屋支部句会 (名古屋市)

野田一念報

首飾り僕も欲しいと五男坊 具沼
ハローとサンキューだけで洋行し 不二郎
亡き母をしのぶ形見の首飾り 昇茂
千鳥足我が家の前でシヤンとなり 一俵
ポケットの手紙で二号の足がつき 文鳥
借金取り足にまかせて追い歩き 千明
行く先は一緒にさせると親がきめ いさむ
行きすりの恋と知りつつ身をこがし 明一本
温泉へ行く費用だけ聞いてみる 随田
行く末を想う教師を吊し上げ 千古
ニコヨンの母にすまないとシタレス 千代春
行くときと違ふ歩調のくる釣師 越鳥
温泉で富士を眺める女秘書 一念

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

舌打ちが聞こえる様な電話切れ まさ子
舌打ちをしてセコハンに手を通し 多津男
舌打ちの癖が課長のカンに触れ みのる
呆けた顔寄附の話は聞き流し 可住
よく呆けられましたと握手され 美千代
若いもんの顔を立てるにはけおき 核兵器に威かされてる平和 左文字
牛ながく鳴いて平和な村は暮れ 越山
駐在所平和な村に来て肥える 凡志
町平和錠をかけずに市場籠 孝風

赤旗に平和の夢を追う愚か 清司
二分咲きへもう花見酒する平和 無鬼

杏林川柳会 (大阪市)

脱線はせぬ約束でゆるしが 出 理枝郎
脱線した覚えもつかぬ二日酔 太希志
脱線の常習犯には妻がつき 瑞川
脱線のとこは日記に書いてなし 生々庵
女房の感脱線へ先手打ち 阿茶
魅力もう失せてこたつの老夫婦 小石
晩めしは付く一本が魅力なり 路文
片えくぼなるほど煙草よく 一哲
結ばれて見れば魅力のない女 同
冷たさも人には魅力的に見え 一伸
アンパナスの荒い目鼻にある魅力 阿茶
官能をゆさぶると云う魅力持ち 同
駄目ですわと云いつつ魅力まだ信じ 瑞川
あの店の魅力はついで飲ます也 生々庵

大阪誠信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

疲れたと言ふ色のない都会の灯 春雄
都おちするには惜しい庭があり 宏子
惚れている弱身はいつも泣寝入り けい女
日の丸も出せずシタットの島に住み 草右
もみくちやにされたあぐの泣寝入り 幸男
ロープウェイ目まぐるしく進むほど霞の谷 風船堂
意見されひっそり泣き明し 竹志
スリルスリル雷族の死の走り 方正
競輪へスリルが過ぎて首を吊り 康彦
女よりスリルがほしいマツハ族 幸男
灯を消した隣りの部屋もスリルなり 路郎
少女のスリル推理小説一二冊 同

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

厭長もやつとラッシユのすんだ顔 好 郎
 漬物のようにラッシユは押し込まれ 雄 声
 ラッシユ今日アベツで居る押されよう 宏 子
 ラッシユから解放された息をすい 同
 ラッシユアワー軒店はこりあびただけ 好 郎
 葉びんラッシユアワーを除けて乗り 雄 声
 ラッシユアワーゆうゆう眼鏡出して読み 貴 山
 ラッシユアワーときどき恋も落ちており 貴 山
 ラッシユアワーああ食うことのむかしき 好 郎
 ラッシユアワーいつも娘は乗りおくれ 好 郎
 ラッシユアワー惜しい一台見送った 雄 声
 今日一度ラッシユに乗りたくない定年後 圭 水
 落し物拾うに困るラッシユ時 同
 ラッシユアワー僕はいつまで平社員 好 郎
 今日からはラッシユも楽し一人だち 圭 水
 若夫婦ラッシユアワーで手が放れ 句 念 坊
 ラッシユアワー煙草の箱が又つづれ 圭 水

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

ベタル踏む力若さに追越され 雄 水
 遅帰り舌で丸めて土産出し 真 砂 老
 弁舌の夫無言の妻に負け 晴 暉
 舌に衣着せず十年君と僕 京 一 楼
 毒舌ももう衰えた詫住居 雅 堂
 家計簿にやつと晩酌出る余裕 風 柳
 はろ酔で帰れば家計簿見せられる 甲 子 朗
 家計簿へ予算を組めばうらさびし 九 紫
 家計簿にゆとりの出来たビニョック 蒼 芒
 要るだけはいりますと家計簿つけもせず 好 祐

羽曳野句会 (羽曳野市)

板倉天悟空報

夢もまた明日への希望を約束し 凡 司
 うたたねの夢は癒って退院し 三 千 郎
 子の夢を聞いとくだけのババであり 我 童
 夢見よし明るさを増す身の廻り 一 峰
 わが夢を子等へ託して父は逝き 滋 郎
 蛇の夢見たのに借金取りが来る やん平
 入社日は未重役の夢をもち 東 天 紅
 デパートはのびをこみたまで稼がせる 淑 子
 デパートのムードに酔うて買わず去に 高 史
 近所への見栄デパートで買いたがり 康 之
 問屋をあまりデパートへ舞い戻り 泉 洋
 避暑避暑お越し下さい百貨店 裕 邦
 屋上もせつせと稼ぐ百貨店 方 孝
 仲ようにそごう大丸隣り合 吸 江
 デパートの地下だけのぞく市場籠 若 芽
 デパートを三つ回って買うと決め 悦 男
 デパートで値踏みしたのが問屋へ来 天 悟 空
 デパートの屋上だけりょうと借り 美 智 子
 デパートのはてりを冷ます戎橋 とも子
 デパートに出雲の神も住みついた よしあき
 貰いたしデパートぐるみのしつて な み
 本心をコケシに聞かす初な恋 山 椒 坊
 強いこと云っても本心眼が語り 保 子
 本心を隠して嫁く娘の細い肩 典 子
 候補者の演説本心らしく言い 翠 邦
 役員になりたい本心ちらつかせ 佐 代 子
 本心は顔を売りたいシキビ立ち 史 好
 本心を知らずヤバレーへまた通い 好 郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

安産をババに知らせる赤電話 北 斗

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

産声を廊下で聞いて目がうるみ 龜 心
 ごしつぶから出来た仲だちらわさされ 柳 志
 悪い噂だけがほんとになる感じ 照 夫
 食欲がうずまきようなめし屋なり 柳 波
 ライスカレーだけが得意の店さびれ 理 休
 食堂がきれいになって味が落ち ぼ たる
 うわさだよ軽くかわして家を買 傍 石
 B G の話題噂の外になし 狂 史

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

顔中の力で負けた腕角力 牛 骨
 暗がりを出れば淑女の顔になり 一 喜
 純情は恋に命を賭けており 素 古 平
 口下手の亭主控えめに座り 賤 女
 数日の余命を蟬は鳴き続け 山 彦 子
 いつからか素足投げ出す妻になり 喜 菜
 斗病の素足は春の風をなで 美 舟

葦川柳句会 (松江市)

田中妖人報

風がなく国旗掲揚元気なし 義 正
 疎遠の友風の便りに無事と聞く 雲 南 路
 物干場満艦飾の暖かさ 翠
 仲裁の風向きこちらへまわって来 稻 子
 労働者に耐あり明日の風があり 三 叉 路
 プルスとる手は暖かく瞳は涼し 由 田 可
 重症の見舞に桜折ってくる 政 子
 二人のボートからこう春の風 雪 美
 あたたかい日を見て孫の初泊り 好 江
 あたたかい我家の膳につがなく 一 生
 ぼつとつりと桜が咲いて療養所 章 道
 白鳥の去り行く今日の暖かさ 明 子
 夜桜ヘデートの足は向いて行き とし子
 療友のその後は風の便りだけ 夏 子
 丁度よいアッササリりの青い羽根 二 三 子
 伝説の柳芽をふく城下町 恵 子
 海と空の青一線が融け合わず 幸 三 郎
 風よ吹けと失意は丘に佇ち 妖 人
 卒業はのぼして欲しい就職難 鵬 人
 卒業はしたがなせぬ親の 匠 城 の 春
 浅学非才僕は桜の匂いすき 孤 呂 二
 さくら咲く故郷のエレジー工事 大 鳥
 暖かい陽射し詩集をめくる音 祥 月
 螢の光マンネリズムに似て卒業 天 翔 人

酌よし 千日前大劇裏 TEL@271-0
 味よし アベノ橋近映地下 TEL@01-47

梅里の店 **大 萬**
 ★大万川柳(第百十二回)を募る
 兼題「大入」路郎先生選
 締切・六月十五日 五句以内
 発表・六月廿一日 (店内掲示)
 投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
 大万川柳会宛



よりの身

一路郎

★今年の川柳まつりは、例年の七月十日前後を繰上げて五月十五日に宝塚で開催された。みんな私の誕生日(七月十日)を祝ってくださる会なので私も当日はよほど出席した。...

★前号で、水曜日を私の休日とすること、その日は川柳の仕事から解放されて、自由な時間を持つことを発表したところ、それは大変にいいことだ。是非断行して、柳界のために永生させよと、多くの柳人たちから、激励の通信をいただいたので、柳界のために、お役に立つ、立たぬは別として、出来るだけ水曜の休養日を有意義なものにしたいと思っている。

募るを告廣見中暑交人柳

川柳雑誌社

- 八月号へあなた
の暑中見舞広告を
★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。
★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
★一口分は五分の一段組三行。
★原稿締切は七月五日着便
★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

ペンの散歩

▼川柳まつりがすんだら、もうすぐそこに四百号記念の九月号が待

っている。すこしもユツタリする気分が味えない。それを幸福だと言ってくれた人があった。「そうかしら」とにかく忙しい。

▼本号も「名句と難句」がオリたが、先生のご健康に交りのないことをご報告申し上げておく。

▼阿部佐保蘭氏に「アール・エッチ・ブライズ教授と語る」を頂いた。高鷲亜鈍氏の「沈黙の人と散文精神」もまた佳篇。さきに、「須崎豆秋論」を発表したが、人物列伝式のものを読者から要望されていたので、こんごも折りにふれご執筆願うつもりである。

▼須崎豆秋氏、後藤梅志氏、松江梅里氏、直原七面山氏ほか、不朽洞会員の方々がペンを執ってくださった。みんなの川柳 みんなで執筆」と、ページに盛り上がりがあれば雑誌はよくなる。評論がすくなくともおめられたら、評論をドシドシ送ってください、あなたが希望する雑誌が出来るのである。主幹はある程度編集部主任任せという寛大主義をとっておられるので、いつも云うように古豪、新人を問わず、力作をお寄せください。

▼お待ち兼ねの「句評リレー」は六月号のまにあわなかった。もう

少しスピーデイにことがはこぶとありがたいのだが。

▼15日の川柳まつりのページを半分こしらえ、残りの原稿をにぎったまま、19日の東宝映画詰まつりに出席した。大阪―東京間の車中で書き、組み、一泊三日のあわただしい旅行だったが、三十何年ぶりに高田稔と肩をならべてカメラにおさまった。香川京子と撮ったのがベクで惜しかった。(二三天)

▼六月の本社句会場略図



6月の会

- ★淀川句会・時、3日(金)六時
★マスコミ・日旺日・見習所、十三西之町五丁目、東淀川郵便局
★富柳句会・時、4日(土)七時
★新聞・ボス・雨・所、富田林公民館階上★倉敷句会・時、4日(土)六時、題、性分・気まぐれ
★ベッド・一人言・なまけ者・所、

倉敷市水島弥生町、四ノ三一榎原一善★篠山句会・時、5日(日)一時、題、衝突・宴会・手放し・所、多紀福祉事務所別館★玉造句会・時、10日(金)七時、題、前ぶれ

・二三行・デラックス・所、市電玉造南百米大阪信用金庫★宇部句会・時、12日(日)一時、題、虫歯・ナフタリン・尼・白状・所、沖ノ山扇町区長事務所★阿倍野句会・時、15日(水)六時、題、反抗期・職人・子守唄・所、旭町二丁目金塚会館★西宮句会・時、17日(金)六時、題、ほんぼん・堤防・ゆううつ・所、阪神西宮駅北出口スグ労働会館★南海電鉄句会・時、30日(木)六時半、題、延着・一ト筋縄・しきたり・所、難波高梁下・親和クラブ★備前句会・時、未定、題、利子・酢・夕立・虫歯・皿・所、久米雄居★弓削句会・時、月末、切、題、待ち呆け・円満・不足・見合・所、久米郡久米南町下弓削四五直原七面山居

お見舞

太平洋岸一帯の大津波におそわれた被害地の皆様いかがでしょうか。ご無事を祈っております。

川柳雑誌社

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌
6月号発売中 130円(〒12円)

貿易自由化の波紋
ビール党の苦言
製粉界の今後

国際見本市特集
カラメルの合理的使用法
リノール酸食品添加

◇海外情報 ◇特許告知板
(商標ニュース・意匠ニュース欄新設)

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・香料等

大阪市北区
木幡町5-5-4
電話345231-4
食品と科学社 大阪6702番

麻生路郎著

好評嘖々

川柳雑誌

川柳の味い方・五百数十句
(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送料三二円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社
大阪 船六〇八一
電話 大阪 船六〇八一
世帯口郵便大七五〇五〇

会長・麻生葭乃女史

川雑 婦人友の會會員を募る

川柳雑誌社内 川雑婦人友の會

どなたでもいつからでも入会出来ます(入会・会費其他連絡事務所へ)

会費一カ年百廿円

大阪市南区ニッ井戸町23

連絡事務所

山川阿茶

神経痛・リウマチに...

西法クノール社より新輸入



オサドリン錠は西法クノール社が多年研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。その作用は確実に胃腸障害などの心配がありません。(10錠) 350円・(20錠) 650円

オサドリン錠

printed in Japan

募 集

課題吟募集

大鶴喜由選

小川恒明選

田垣方大選

若本多志選

富岡淡舟選

野村味平選

近作柳梅 麻生路郎選

北川春巢選

川柳塔 麻生路郎選

文 章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

設句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。

「課題吟」は誰でも投句が出来る。川柳塔の投句は不朽詞會員に限る。

B例5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三十五号

定価 七〇円 (送料四円)

半年 四四四円

一カ年 八四〇円

昭和三十五年五月廿五日印刷

昭和三十五年六月一日発行

大阪市住吉区西五丁目二五番地

麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地

電話 大阪 船六〇八一

世帯口郵便大七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和三十五年六月一日 発行(毎月一回一日発行)

編集 兼 発行印刷人

麻生幸三郎 発行所

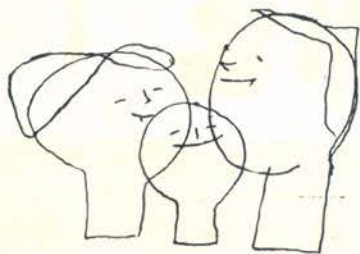
川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二番五番地 電話大阪六〇八一

振替口座大阪七五〇五〇番

定価七十円(送料別)

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2

あなたの個性を生かす。

福助足袋株式会社
福助商事株式会社

福助靴下

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして發生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

送価 二五〇円
三五〇円

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507



あなたの句帖が
出来ました

★路郎好みだけに、すばらしく気が
きいています。句会でお使いになる
なり、抜けた句の整理にお使いにな
れば、何冊かで、あなたの句集の礎
稿が出来ます。又柳友への贈答に、
句会の賞品にも最適です。是非ご利用
下さい。

一冊五五円・送費八円・十冊五〇〇円

大阪市住吉区西五丁目二番五番地

川柳雑誌社

電話大阪六〇八一
振替大阪七五〇五〇番